

鯨 研 通 信



第400号

1998年12月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)

◇ 目次 ◇

「鯨研通信」50年、400号の出版活動を振り返って	大隅清治	1
北西北太平洋におけるミンククジラの食性について	田村 力	5
絶滅の危機を救った捕鯨ボート「レスキュー」	浜口 尚	12
日本鯨類研究所関連トピックス（1998年9月～11月）		20
日本鯨類研究所関連出版物等（1998年9月～11月）		22
京きな魚（編集後記）		27
(財)日本鯨類研究所役員名簿及び記念写真		28
ストランディングレコード（1998年9月～11月受付）		30

「鯨研通信」50年、400号の出版活動を振り返って

大隅清治（日本鯨類研究所）

1. はじめに

当（財）日本鯨類研究所の前身である（財）鯨類研究所が農林省指令22第2014号によって設立されたのが、日本が敗戦して間もない、昭和22年(1947)8月20日であった。そして、「鯨研通信」は“鯨研”と略称する鯨類研究所のPR誌として、1年間の準備期間を経て、第1号が1948年8月に発行された。以来本誌は満50年にわたる永い期間継続して出版され、今年(1998年)12月に400号を発行することとなる。

今では多くの企業や研究機関がそれぞれの特徴あるPR雑誌やニュースレターを発行しているけれども、小さな民間の研究所在50年前にこの種の雑誌を発行し、それが50年間も継続しているのは珍しいといえるし、日本における鯨類と捕鯨に関する知識の普及にいささかでも貢献

してきたことを、当研究所は大いに自負している。

「鯨研通信」出版50周年、第400号発行の記念すべき時に、本誌のこれまでの出版活動を振り返って、今後の更なる発展に期待したい。

2. 創刊の経緯

物資の極端に不足していた時代に発行された本誌の1、2号は、ザラ紙にガリ版印刷されたと記録されている。僅か200部しか印刷されなかったそれらの現物は、当研究所には残念ながら保存されていないが、もしもお持ちの方はお知らせ頂ければ有り難く、コピーをさせて頂きたい。幸いに、本誌は最初から好評で、読者の入手希望が強く、直ぐに余部が無くなったので、1、2号を合わせて翌年活版印刷で再版された

のが現在存在する。しかし、それもザラ紙の用紙に印刷されていて、今では茶色に変色し、脆くなっていて、当時の日本社会の疲弊振りと創刊の古さを無言で証言している。

本誌創刊号の巻頭を飾る、「発刊ノ辞」には、次の言葉が記されている。“そもそも我々が研究するのはその成果を広く発表するのが目的である。広く発表するのはその功績や努力を誇る為ではなく研究の結果を人々に活用してもらいたいからである。この目的達成の為には捕鯨関係者に広く理解して頂く必要があり、広く理解して頂くには高度の学術的表現を採らずに解説を附して研究者の意のある処を納得してもらわなければならない。その目的で「鯨研通信」を思ひ立ったのである。”

この辞は鯨研の初代の所長であった、丸山勉氏の筆になるが、本誌の発行の目的は50年を経た今日でも変わっていない。今それを読み返して、創刊時の鯨研の高い理想に感激するとともに、「初心忘れるべからず」と肝に銘じる次第である。

上の文を理解する為に付け加えると、鯨研は研究報告を最初から英文で発行したのである。最近でこそ日本の学界や研究所の研究報告は英文で発表する例が多くなっているが、昭和20年代に研究所報告を英文で出版する例は希であった。鯨研は最初から世界の鯨類研究者を対象にして、研究の成果を示そうと意気込んだのである。鯨研創設期の経営陣の卓見が忍ばれる。この英断によって、「英文報告」として研究員に略称された「Scientific Reports of the Whales Research Institute」誌は、直ぐに世界の鯨類研究者に名が知られ、よく読まれ、多く引用されるようになった。しかし、英文で書かれるから、鯨研のスポンサーである、国内の捕鯨関係者に読んで頂くには不向きである。そこで、研究成果を国内に普及させることを目的にして「鯨研通信」が発行されたのである。

3. 「鯨研通信」の変遷

旧鯨研と現日鯨研は戦後日本の捕鯨の変遷とともに歩んできており、本誌はその間の捕鯨活動と鯨類資源研究の消長を表わすバロメーター

でもある。今こうして本誌の1号からの、積み重ねると30cmにもなる分厚い頁を、手回しの活動写真のように捲ってみると、その変遷の過程をはっきりと読み取れる。

本誌の発行が開始された1948年は戦後日本の捕鯨復興期に当たる。以後捕鯨の発展と共に、徐々に月刊誌としての本誌の内容が充実してきて、1958年の80号から1964年の160号位までが本誌の最も充実した時代であったと評価され、所員が競って本誌に研究の成果を記事として掲載した。この時代は戦後日本の捕鯨が最も発展した時代と一致する。しかしその後、国際捕鯨委員会の捕鯨規制の強化によって日本の捕鯨は縮小に転じ、鯨研のスポンサーである大手水産会社捕鯨部門の縮小は必然的に鯨研の経営に反映し、1965年から研究所員の放出による削減が急速に行われ、鯨類資源調査研究部門は水産庁付属水産研究所に移り、2人の所員が移動した。東大海洋研究所の資源生物部門が海獣類の生態研究を展開し始め、鯨研はそれに伴って縮小、変質し、本誌は残った所員を中心とした記事では支え切れなくなるとともに、発行も滞るに至った。そして、ついに日本は商業捕鯨の中止の止むなきに至り、1987年10月に鯨研は(財)日本鯨類研究所に改組した。

鯨類捕獲調査の実施と推進のために発足した日鯨研は、本誌の発行を継続させたけれども、捕獲調査が星雲状態にあった暫くの間は組織固めに追われ、本誌の発行は殆ど機能しないであった。やがて、日鯨研は創世期から脱し始め、1994年から本誌の編集方針を大きく変えて、日鯨研の賛助会員に対するPR誌としての性格を強めた。それとともに季刊誌として発行が順調に為されるようになり、鯨類捕獲調査が順調に発展してきたことと同調するかのようになり、その後本誌の編集委員会の活動が活発となり、次第に内容が充実して、今日に至っている。

4. 本誌の体裁の変遷

本誌は最初のザラ紙、ガリ版印刷から活版印刷になっても、質実剛健の研究所の伝統を守り、実質本意で、表紙を付けず、アート紙を使わず、カラー印刷にもせず、現在に至っている。

紙質がザラ紙の時代が1955年12月の本誌51号まで続いた。それ以後は上質紙に代わって今日まで続いている。本誌のサイズは最初から現在まで、B5版を貫いている。

本誌の最初は縦書き、2段組み、左捲りであり、最初の頁の右上肩に「鯨研通信」の題字、号数、アドレスが入り、18号から研究所のシンボルマークが入るようになった。因みにこのシンボルマークは鯨類研究所の創立当時の研究員であった、俵正氏によってマッコウクジラをモチーフにしてデザインされたものである。この形式がしばらく続いたが、221号からは、アンケートの結果に基づいて、横書き、2段組み、右捲りに大きく体裁を変更した。

132号からはクジラに関する一口メモ的な「しおふき」欄が作られて、所員が交代でこの欄の執筆を担当し、151号まで続いた。209号からは「図書室だより」欄が設けられ、新着の図書や寄贈の研究報告別刷りなどを紹介するようになり、この欄はやがて「ぶつくす」と改名して、368号まで続いた。さらに、364号から「ストランディング・レコード」欄が設けられて、この欄は現在まで続いている。

372号から組織が大きく変わっても、本誌は従来の体裁とシンボルマークを踏襲していたが、379号から本誌の編集方針を大きく変え、日鯨研が制定した新たなシンボルマークに代わった。新たなシンボルマークは現在当研究所の業務嘱託員になっている、高木岑生氏によって、ミンククジラの背鰭と尾鰭をデザインしたものである。この号から、それまでの論文に加えて、「日本鯨類研究所関連トピックス」、「日本鯨類研究所関連出版物等」欄を設けてニュース性を増し、「京きな魚（編集後記）」が加わり、さらに397号からは、「目次」欄が設けられた。

このように、本誌は400号の出版活動の過程で、編集方針が徐々に変化してきたけれども、出版の思想は堅持されている。

5. 編集後記について

本誌の初代の編集長は、前述の丸山勉所長であった。彼は鯨研の前身である、中部科学研究所からのメンバーで、鯨類研究所の発足に伴っ

て、所長として就任した。彼は本誌の創刊号から「青鯨亭夢想観」と題する欄を設けて、その時々感じたこと、考えたことを記して、編集後記とした。この欄は21号まで飛び飛びに続いた。

しかし22号からは、しばらく編集後記に当たる記事がなかった。1955年8月発行の49号に「編集者の言葉」欄が付けられたが、1回きりで、しかも署名がない。大村秀雄さんが水産庁を退官して、鯨研の理事として就任したのが、1954年9月であり、所長に就任したのが1955年7月であったが、これが彼の文章でないことは確かである。

大村さんが鯨研に赴任してからは、彼が本誌の編集長となったが、編集の実務は若手の所員が1年交代で担当した。そして、その後も編集後記は記載されなかったが、76号から「鯨研だより」欄が設けられ、それからは大村さんがこの欄の執筆を殆ど担当して、216号まで長い間健筆を振るった。

「鯨研だより」に代わる欄として、222号から「せたしあ」欄が設けられ、所員が交代でこの欄を担当した。この欄は日鯨研が発足してからも引き継がれたが、379号でついに姿を消した。

本誌は1992年3月に382号を発行してからしばらくの間休刊状態が続いた。しかし、1994年9月発行の383号から再開した。そして、「京きな魚」と題して編集後記を編集長の私が担当した。389号からは編集長の役目を守矢哲さんにバトンタッチしている。

6. 「鯨研通信」の内容を紹介した本

本誌のそれぞれの号で取り上げられた記事は断片的であるけれども、それが400号ともなると、鯨類の生物学と捕鯨に関連するかなりの量の情報が盛り込まれ、種々の分野にわたっていることが分かる。

有り難いことに、それらの記事に丹念に目を通し、それをうまく分類して目録として紹介して下さった人がいらっしやる。その人は趣味で「海棲哺乳類研究所」を主宰しておられる野島孝夫さんであり、それを纏めて1994年に自費出

版して下さった本が「大改訂版・くじらの本」である。このA4版、177頁の本の中で、47頁を割いて、「鯨研通信分野別総目録」と題して、本誌の1号から382号までの全ての記事を分類して、細大漏らさず紹介している。その分類項目は本誌の性格を良く理解して為されており、大変に利用しやすい。そして、この目録を眺めると、本誌が鯨と捕鯨に関する百科全書のように感じられ、それまでの間に本誌に寄稿して下さった人々のご努力に改めて敬意を表したくなる。

本誌をリストアップして、記事を詳細に紹介して下さっている本がもう一つある。それが「鯨類関係書籍」である。著者は富山県砺波市の市役所に勤務されている台蔵正一さんである。この2分冊、総計236頁の今年自費出版された本は、著者が趣味で収集した鯨類関係図書の日録である。その中で本誌第381号から398号までの各号の目次を全て記録している。

これら2冊の本はそれぞれ編集の仕方が異なるが、目を通して頂くと、本誌のこれまでの記事の全貌が容易に捕らえられて、便利であるので、この際に紹介し、推薦したい。

7. 「鯨研通信」と私

私は大学の学部3年の1952年から鯨研に出入りしていた。当時私は貧乏学生で、種々雑多なアルバイトを経験したが、たまたま鯨研で組織標本作成の口があり、確な技術も持たずに、厚かましくもこれに応募したのが切っ掛けであった。そんなことから卒業論文も所員の西脇昌治先輩の指導を受けて、鯨研で作成することが許された。大学院に進学しても、博士課程を修了するまで、大学よりも鯨研で長く過ごし、やがて本誌の編集作業まで手伝うようになった。その頃本誌の編集を担当していた若手の研究員には、根本敬久君など鼻っ柱の強い連中が揃っており、海洋学の大御所であった東水大の宇田道隆さんの原稿でも、書き直させたほどであった。

本誌に私が書いた記事が最初に載ったのは、1955年2月発行の44号であった。当時鯨研では今の「鯨類資源研究会」の前身ともいえるべき、「鯨研談話会」が、水産庁、東大医学部、東大

薬学部、東水大、大手水産会社捕鯨部、捕鯨協会などの職員がメンバーに加わって組織されていた。私が談話会の書記を担当し、最初の会合の記録を、私が短い記事として誌上で報告した。

私の最初の解説記事は「鯨の過去帳一珍しい捕鯨統計」と題して、63号に載せて頂いた。これは山口県通村（現在は長門市通地区）の向岸寺という、「鯨の墓」で有名な寺に保存してある鯨の過去帳についての紹介であった。この記事は本誌に掲載された私の最初の論文であるので印象深く、特異な研究の切り口であったと今でも自負している。

それ以後鯨研を離れる1966年4月まで、私は自分で行った調査、研究の報告、紀行文、解説、翻訳などを、本誌に精力的に掲載した。本誌は月刊発行を貫いたので、僅か数名の所員が必死になって出版活動に努めたのである。その間の10年弱の鯨研在籍期間に、私が本誌に掲載した記事の数を調べたところ、研究報告16編、調査報告6編、紀行文10編、解説8編、翻訳4編、合計44編であった。水産庁の研究所に移ってからは、寄稿する機会は減ったものの、時々本誌に雑文を載せて頂いた。そして、日本鯨類研究所に奉職してからは、当然ながら本誌を支え、発展させるためにできるだけ多くの記事を執筆するように努めている。

永年にわたる本誌の編集と記事の作成のお陰で、そのために失った時間は多かつたけれども、得たものも多かつた。本誌に強く関わることによって、文章を書くのは億劫にならなくなった。編集作業に従事したメリットは、書き言葉の使い方に注意を払うようになったことである。そのデメリットとして、他人の文章が気になり、つい勝手に手を入れてしまって響きを買うことが挙げられよう。

8. おわりに

こうして、「鯨研通信」の出版活動50年、400号発行の歩みを振り返ると、旧鯨研のOBとして、しかも現日鯨研の役員として、感慨は入りのものがある。

現在本誌は当研究所の賛助会員を対象にして、当研究所の調査・研究活動を紹介し、それ

らの活動についての理解を深めて頂き、より強い支持を頂くためのニュースレターである。そのためには、鯨類資源の合理的利用を目指す資源管理の道を追求する、当研究所の目的に添った調査・研究の進展の最新情報を、できるだけ早く、より多く、適確に、しかも分かり易く、会員に伝える努力と工夫が為されなければならない。また、読者の本誌に対する忌憚のないご叱正と建設的なご提言をお願いしたい。

そのような本誌がさらに成長することによって、賛助会員の支持と増加とを得られ、それが

当研究所の発展と鯨類資源の合理的利用の早期実現に繋がると信じる。

本誌の400号の発行を心から祝い、これまで50年間本誌の出版、発行に関係してきた多くの先輩、現職員の努力を大きく称え、本誌を長い間支持してこられた沢山の読者に厚く感謝する。それとともに、本誌が今後さらに発展し、飛躍するために当研究所の所員が努めることをお誓いし、捕鯨関係者と鯨類愛好者の皆様の一層のご支持とご愛読を強く希望する。

北西北太平洋におけるミンククジラの食性について

田村 力 (日本鯨類研究所)

1. はじめに

北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査(JARPN)は、北西北太平洋に分布するミンククジラの系群構造を明らかにすることを目的として、1994年から開始した。1996年以降では、さらに同海域におけるミンククジラの摂餌生態を明らかにすることを調査目的の一つに加えた。1996年にはそれまでに行ってきた食性調査を充実させるために、ミンククジラの食性研究の先駆者であるノルウェーの研究者と共同で食性調査を行うとともに、食性研究を推進してきた(Lindström *et al.*, 1997; Tamura *et al.*, 1998; 田村, 1998)。

ミンククジラなどのヒゲクジラ類は海洋生態系における高次捕食者であり、食物連鎖の構成員として重要な役割を担っている。とりわけ資源量の大きいミンククジラが生態系に与えている影響は、他のヒゲクジラ類と比較しても非常に大きいと考えられる。例えば南極海におけるミンククジラの年間推定摂餌量が、全ヒゲクジラ類によるナンキョクオキアミ消費量の実に95%以上になると推定されている(Armstrong and Siegfried, 1991)。また北東北大西洋海域のミンククジラは、漁業対象種になっているニンヤカラフトシシャモ、イカナゴ、タラ等を摂

餌し、その年間推定消費量が約80万トンにも及ぶと推定されている。中でもニシンの消費量(63.3万トン)は同海域のニシン漁獲量の70%にも達していると試算されており(Folkow *et al.*, 1997)、ミンククジラと人間の漁業活動との競合が示唆されている。本報では、1994年から1998年までの調査で収集したデータを用いて、北西北太平洋におけるミンククジラの食性とその摂餌量についての研究結果を報告する。

2. 調査期間及び海域

北西北太平洋はミンククジラ資源の改訂管理方式(RMP)の適用のためのシミュレーションによる試算を行なうために、国際捕鯨委員会/科学小委員会(IWC/SC)によって13の小海区に区分けしている。1994年からのJARPNは、これまで外国の200海里水域を除く北西北太平洋の7海区、8海区、9海区及び11海区の一部で実施した。7海区については更に沿岸域(7W海区)と沖合域(7E海区)とに分けて調査した。

調査期間は年によってずれるが、晩春から初秋にかけての5月から9月の間である。1997年までのJARPNの概要については、『鯨研通信』の385、390、395、399号において報告されてい

るので、それらを参照されたい（藤瀬, 1995, 1996, 1997; 石川, 1998）。

3. 胃内容物調査の概要

採集されたミンククジラは速やかに調査母船である日新丸のデッキ上に運び、体長、胴周等の外部計測及び体重測定などを行った後に解剖した。ミンククジラの胃は第一胃～第四胃の四つの室から構成されているため、各胃の内容物が混合しないように注意しながらメスカップやバケツを用いて、第一胃から順にそれぞれの胃内容物を大型のポリ容器に移した。その際、第一胃内容物を対象とし、オキアミ類(Eu)、橈脚類(Ca)、端脚類(Am)、魚類(Fi)及びその他(頭足類などOt)の5項目に大別して調査野帳に記録した。また、第一胃の充満度は、空胃の場合を「0」、25%未満の場合を「1」、25～49%の場合を「2」、50～74%の場合を「3」、75～100%の場合を「4」、銹による破損の場合を「5」の6段階、餌生物の鮮度は、未消化の場合を「F」、やや消化の場合を「fff」、半消化の場合を「ff」、消化の場合を「f」の4段階に分類して調査野帳に記録した。その後採集した各胃の水分を含んだ内容物及び水分を除いた内容物重量を、パネばかりを用いて0.1kg単位で測定して調査野帳に記録した。

また、1996年調査からはノルウェーで採用されている大型の3段式篩（ふるい）システム（図1）を導入し、餌生物の消化状態別の重量組

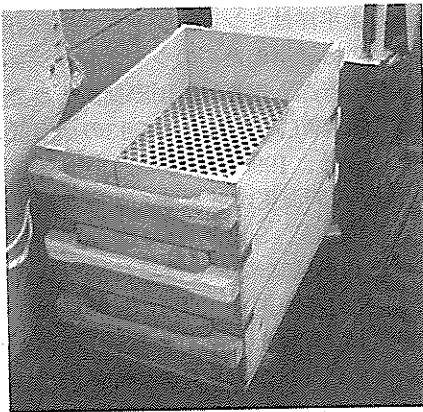


図1. 大型の3段式篩装置。

成を0.1kg単位で測定すると同時に、魚類の耳石やイカ類の嘴（ビーク）の採集を行った。この方式を採用することによって従来採集が困難であった耳石などが採集可能になり、定量的な胃内容物解析が可能となった。

4. 餌生物の種類及び摂餌方法

南北両半球においてミンククジラが利用している餌生物の種類など食性に関する定性的な知見は、現在までにかなり蓄積されており、生息海域や季節・年によって利用している餌生物の種類構成が大きく変化することが明らかになっている。また、北西北太平洋におけるミンククジラで、主要餌生物としてカイアシ類やオキアミ類などの動物プランクトンからマイワシやマサバなどの表層集群性魚類まで幅広く利用していることが報告されている（Horwood, 1990; Kasamatsu and Tanaka, 1992）。

1994年からのJARPANで認められた餌生物種は、カイアシ類1種類、オキアミ類4種類、頭足類1種類、魚類10種類の計16種類であった。この中には、数量から見て偶発的に摂餌されたと考えられる餌生物（キタイカナゴ、ギンザケ、ミズウオダマシ）も含まれているが、以降の解析では対象から除いた。

表1に第一胃内容物がどのような餌生物種で構成されていたかを示した。ミンククジラの胃内容物は、いずれの海区においても80%以上が単一種で構成されていた。また、2種類以上で構成されていた場合の餌生物の組み合わせを見ると、その大半が、動物プランクトンとプランクトン食魚類、またはプランクトン食魚類と魚食魚類という捕食・被食関係にあった。

ミンククジラは前述のように大半の個体の胃内容物が単一種で構成されており、パッチ状に集中分布しているこれらの餌生物を海水と共に一気に口腔内へ飲み込んで摂餌する“飲み込み型(swallowing)”と考えられた。

5. 餌生物の海区・期間による相違

JARPANで認められた主要餌生物（胃内容物

表1. JARPNで観察したミンクジラの第一胃内容物構成種類数

種類数	餌生物種	7W		7E		8		9		11	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1	カイアシ類							1	0.6		
	オキアミ類	8	30.8	1	2.1	1	1.3	8	4.7	22	100
	サンマ	12	46.2			32	41.6	79	46.2		
	カタクチイワシ			43	91.5	34	44.2	61	35.7		
	スケトウダラ	2	7.7								
	マサバ					1	1.3				
	シマガツオ							1	0.6		
	種不明カマス科魚類							1	0.6		
	種不明サケ属魚類			1	2.1			1	0.6		
		計	22	84.7	45	95.7	68	88.3	152	88.9	22
2	オキアミ類+カタクチイワシ			1	2.1			2	1.2		
	オキアミ類+サンマ	2	7.7			1	1.3	4	2.3		
	オキアミ類+サケ属魚類							1	0.6		
	オキアミ類+カマス科魚類							1	0.6		
	カタクチイワシ+サンマ					2	2.6	1	0.6		
	カタクチイワシ+マイワシ							4	2.3		
	カタクチイワシ+サケ属魚類			1	2.1	2	2.6				
	サンマ+スケトウダラ	1	3.8								
	サンマ+サケ属魚類					2	2.6	3	1.8		
	サンマ+カマス科魚類							1	0.6		
	サンマ+イカ類	1	3.8			1	1.3				
	計	4	15.3	2	4.2	8	10.4	17	10.0		
3	オキアミ類+サンマ+サケ属魚類							1	0.6		
	カタクチイワシ+サンマ+イカ類					1	1.3				
	計					1	1.3	1	0.6		
4	オキアミ類+サンマ+シマガツオ+サケ属魚類							1	0.6		
	計							1	0.6		
観察数	合計	26	100.0	47	100.0	77	100.0	171	100.0	22	100.0

の中で最も重量割合が高い餌生物)を、海区及び期間を分けて表2に示した。ミンクジラの主要餌生物は、オホーツク海南部の11海区でツノナシオキアミが、太平洋側の7・8・9海区でカタクチイワシやサンマが高い割合を示しており、さらに8・9海区では6月から7月にかけて主要餌生物がカタクチイワシからサンマに移る傾向が認められた。また、大陸棚上の7W海区ではスケトウダラ、外洋域の9海区ではサケ属魚類の餌生物としての重要性も明らかとなった。

夏季の北海道太平洋沿岸域における1968~76年でのミンクジラの主要餌生物はマサバであったが、1977年以降はマイワシに変化していた。同様に、1977年以降のこの海域でのマイワシの漁獲量は激増しており、ミンクジラの食性の変化は、来遊するマイワシとマサバの資源量および漁獲量の経年変化と一致していたことが報告されている(Kasamatsu and Tanaka, 1992)。

JARPNでは夏季の北海道太平洋沿岸に相当する海域(7W海区)での主要餌生物はサンマ、スケトウダラおよびツノナシオキアミと考えられ、過去に主要餌生物として報告されていたマサバやマイワシは胃内容物中に認められたものの、極めて少量であった。夏季の北海道太平洋沿岸におけるミンクジラの食性と漁業による水揚げ量の経年変化を、図2に示した。このようなミンクジラの食性の経年変化は、1987年以降における浮魚類の来遊量の変化、すなわちマイワシの激減(中明, 1997)を反映しているように考えられる。

これらのことからミンクジラは索餌海域で資源量が多くて表層集群性の強い生物を利用し、なおかつ量的な餌生物環境の変化によってその餌生物を柔軟に変化させる広食性を有するものと考えられる。

表 2. JARPNで観察したミンククジラの海区・季節別の主要餌生物の出現数と出現頻度

調査海区 調査期間 餌生物種	11* (8月)		7W* (8-9月)		7E***** (5月)		7E** (7月)		8***** (5-6月)		8** (7-8月)		9*** (5-6月)		9**** (6-9月)		合計	
	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
カイアシ類															1 (0.9)		1 (0.3)	
ツノナシオキアミ	22 (100)		10 (38.5)						1 (2.9)		1 (2.4)				4 (3.5)		38 (11.1)	
他オキアミ類															4 (3.5)		4 (1.2)	
種不明オキアミ類							1 (33.3)						1 (1.8)		1 (0.9)		3 (0.9)	
サンマ			13 (50.0)				1 (33.3)		1 (2.9)		35 (83.3)		4 (7.0)		84 (73.7)		138 (40.2)	
カタクチイワシ					43 (97.7)		1 (33.3)		33 (94.3)		5 (11.9)		52 (91.2)		15 (13.2)		149 (43.4)	
マサバ											1 (2.4)						1 (0.3)	
シマガツオ															1 (0.9)		1 (0.3)	
カラフトマス															2 (1.8)		2 (0.6)	
スケトウダラ			3 (11.5)														3 (0.9)	
種不明サケ属魚類						1 (2.3)									1 (0.9)		2 (0.6)	
種不明カマス科魚類															1 (0.9)		1 (0.3)	
観察数	22 (100)		26 (100)		44 (100)		3 (100)		35 (100)		42 (100)		57 (100)		114 (100)		343 (100)	

*: 1996 JARPN

**: 1996,1997 JARPN

***: 1997 JARPN

****: 1994,1995 JARPN

*****: 1998 JARPN

6. 胃内容物の重量及び鮮度の経時変化

JARPNのミンククジラの水分を含んだ第一胃内容物重量の体重比の平均値を1時間ごとに算出して、その経時変化を図3に示した。値は、夕方増加する傾向が認められた。また、太平洋側(7・8・9海区)及びオホーツク海南部(11海区)での主要餌生物の鮮度の経時変化を図4に示した。オホーツク海南部では日中に鮮度の良い個体がほとんどなく、夜間に摂餌活動を行っている可能性があると考えられた。また、太平洋側では主要餌生物を分けて示したが、いずれも鮮度の経時変化は認められなかった。カタクチイワシ及びサンマは、昼間は表層で集群していることから(Inoue and Ogura, 1958; Wada and Kitakata, 1982)、太平洋側では決まった摂餌時間を持たずに、昼間に日和見的な摂餌活動を行っている可能性が考えられた。

7. 摂餌量推定

現在JARPN調査では、第一胃～第四胃の各胃内容物重量の測定を行っているが、摂餌量の研究では消化の影響を受けない第一胃の内容物情報を用いる場合が多い。今回は、“JARPNデータに基づく直接的な摂餌量推定”及び“標準代謝量に基づく間接的な摂餌量推定”の2通り

の方法を用いて1日の摂餌量推定を行った。なお、この摂餌量推定方法の概要は、『鯨研通信』の396号に紹介されており、そちらを参照されたい(田村, 1997)。

7.1 JARPNデータに基づく直接的な摂餌量推定

本研究では、1994年から1998年のJARPNで採集されたミンククジラ398頭の生物学的データ(体重、性別及び第一胃内容物重量値)を用いて1日の摂餌量を推定した。始めに採集したミンククジラの発見時刻を地方平時に変換し、次に直接測定された第一胃内容物重量とミンククジラの体重から、摂餌率(第一胃内容物重量の体重に対する割合)を算出し、その平均値を1時間毎に求めた(図3)。鯨類の消化速度は非常に速く、満胃状態でも4～5時間で大部分の餌生物が消化される(Bushuev, 1986)ことから、摂餌5時間後の未消化物が全体の10%($S=0.63$)と仮定した。以上のパラメータを用いて1日の摂餌量を推定すると、体重比の3.6%となった。

7.2 標準代謝量に基づく間接的な摂餌量推定

標準代謝量に基づく摂餌量推定を行うためには、初めに様々なパラメータを設定する。標準代謝量(SMR)の算出は、基礎代謝量とミンクク

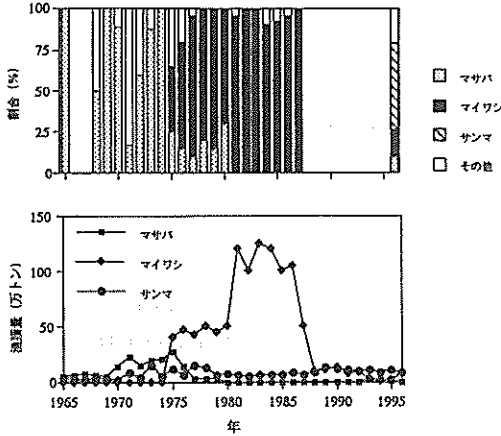


図2. 夏季の北海道太平洋沿岸域におけるミンククジラの主要餌生物組成と漁業による水揚量の経年変化。(Kasamatsu and Tanaka 1992) と『北海道農林水産統計年報(水産編)』の1965-1995年版を参照。

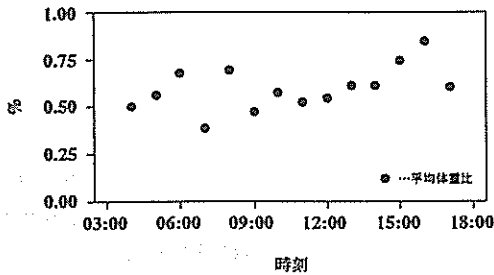
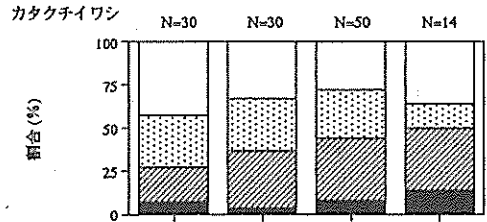
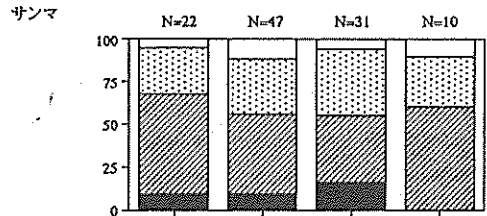


図3. ミンククジラの第一胃内容物平均重量(体重比)の経時変化。

ジラの活動をパラメータとしたMarkussen *et al.* (1992)の式を用いた。その際に必要な平均体重は、JARPN調査で直接測定されたミンククジラ398頭の体重から雌雄それぞれ4,300kgとした。

ヒゲクジラ類は繁殖場と索餌場間の大規模回避を行い、索餌場以外の海域ではほとんど餌をとらないと考えられている。本研究ではミンククジラが索餌海域に滞在する日数(D)を180日とし(Ohsumi, 1980)、索餌海域以外での日間摂餌量を索餌海域のその1/10と仮定した(Lockyer, 1981)。これに、成長に必要なエネルギー量(G)として1日に3.0kg、雌には出産に必要なエネルギー量(R)として 4.5×10^6 Kcalが必

太平洋側(7,8,9海区)



オホーツク海南部(11海区)

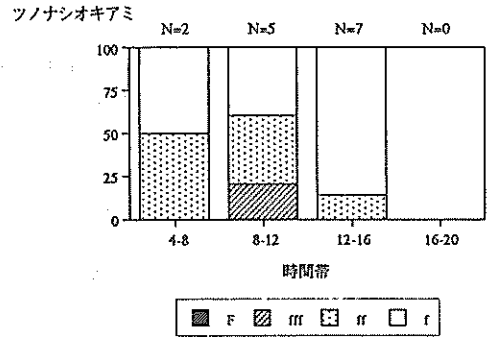


図4. 太平洋側及びオホーツク海南部におけるミンククジラの胃内容物鮮度の経時変化。

要であると仮定した(Christensen, 1981)。また、主要餌生物の含有エネルギー量(E)を1kg当たり1,200kcalとし、エネルギーに変換される同化効率(A)を80%とした(Markussen *et al.*, 1992)。これらのパラメータを用いて、索餌海域滞在期間中におけるミンククジラの1日の摂餌量を、性毎に以下の式を用いて推定した。

$$\text{雄(kg/day)} = \frac{\text{SMR} \times 365 / (\text{D} + 185 \times 0.1) / \text{E} / \text{A}}{\quad} \quad (1)$$

$$\text{雌(kg/day)} = \frac{\{\text{SMR} \times 365 / (\text{D} + 185 \times 0.1) + \text{R}\} / \text{E} / \text{A}}{\quad} \quad (2)$$

その結果、索餌海域滞在期間中におけるミン

ククジラの1日の推定摂餌量は、雌雄がそれぞれ130.6kg、107.0kgとなった。これを体重比で表すと、雌雄がそれぞれ3.0%、2.5%となる。これらの値は前項で直接的方法である胃内容物重量の経時変化から推定した値とも同様な値であった。また、この値は、同じような摂餌生態を有する北大西洋におけるミンククジラの1日の推定摂餌量の体重比（雌：3.3%、雄：3.1%；Markussen *et al.*, 1992）とも同様な結果であった。

JARPN調査の記録では、第一胃内容物重量値の最大は135.6kgであり、これは体重の2.5%にあたる。従って、1日1回満胃の状態になるだけでは、要求量を満足できないものと考えられた。

8. 他生物や漁業活動への影響

それでは、摂餌期間中にどのような餌生物をどのくらい食べているのか？この問題は、ミンククジラと餌生物との間に存在する相互関係を明らかにするのに非常に重要である。例えば、ミンククジラが1日に必要な餌生物の量を体重の2.5~3.6%と仮定すれば、平均サイズのミンククジラで107~155kgの餌生物が必要ということになる。

夏季にオホーツク海を含めた北西北太平洋域に分布しているミンククジラの資源量は、約25,050頭と推定されており(Buckland *et al.*, 1992)、同資源による総消費量は180日間で48.2~69.9万tと推定された。

沖合の9海区では、7月から8月に分布するミンククジラはJARPNの目視調査から3,065頭と推定されており(Miyashita and Fujise, 1997)、また同じ調査の胃内容物の観察から、この海域のミンククジラの8割がサンマを捕食していることが明らかになっている(Tamura *et al.*, 1998)。9海区に分布するミンククジラが7月から9月にかけて変動しないとすると、ミンククジラは同海域において3.0~4.3万トンの餌生物を消費し、サンマはこの内2.4~3.4万トンにも及ぶものと推定される。しかも、ここで用いたミンククジラの資源量推定値は過少評価していると考えられており(Miyashita and Fujise,

1997)、実際の消費量は今回算出された値より更に高いものと考えられる。

また日本の太平洋沿岸域のミンククジラについては、Bucklandら(1992)が1990年と1991年の8月に行った目視調査から約5,840頭と推定しており、同様に試算すると、サンマは4.5~6.5万tがミンククジラによって捕食されているものと推定された。

1995年における全国のサンマの漁獲量は約27万t（農林水産省北海道統計情報事務所, 1997）であり、今回推定したミンククジラによるサンマ消費量は、日本近海におけるサンマの漁獲量と比較しても数十%に相当しており、ミンククジラによるサンマの消費は無視できないと考えられた。また、JARPNではミンククジラの発見位置とサンマ漁場位置との比較を行った結果からも、両者の間に密接な関係があることが示唆されている(藤瀬, 1997)。

従って、前述した北東北大西洋のミンククジラとニシン漁業の関係と同様に、日本近海においてもミンククジラとサンマ漁業との間に競合関係が存在する可能性が高いと考えられた。また、最近のJARPNの結果から、北西北太平洋域のミンククジラは、5月と6月ではカタクチイワシ、7~9月ではサンマを主として利用しており、季節によって餌生物が変化していることが明らかとなった。このことは、サンマと同様にカタクチイワシやスケトウダラ、サケ属魚類等についてもミンククジラと漁業活動との間に競合関係が存在する可能性があり、今後量的な側面からの検討が必要であろう。

この問題を考える上で注意しなくてはならないのは、今回消費量を算出するために用いたパラメータには、多くの仮定が用いられているということである。その為に今後これら一つ一つに対して出来る限り妥当な値を当てはめていくことが必要である。また、ミンククジラは南北の大きな回遊を行うために、海域内での分布量も季節で大きく変動する事が考えられる。従って、今回のようなミンククジラの消費量を算出する場合には、このような分布量の季節変化も考慮して検討する必要がある。残念ながらこれらの情報は十分ではないが、現段階で言えることはミンククジラ一種を考えただけでも非常

に多くの餌生物を必要としているということである。ミンククジラの資源頭数が増加すれば、今後更に人間と水産資源を奪い合うことになる可能性は高くなる。

現在、ミンククジラと餌生物との間に存在する相互関係を更に明らかにするために、ミンククジラの食性調査と併行して餌生物の資源量推定などの総合的な生態系の調査を行う必要性が高まっており、その計画が関係機関の協力により進められている。

9. 謝辞

胃内容物採集にあたり多大なる御協力を戴いた当研究所職員の方々及び共同船舶(株)日新丸乗組員の方々に深く感謝の意を表す。最後に、本報を作成するにあたり多くの有益な助言をいただいた当研究所職員諸氏に厚くお礼を申し上げます。

10. 引用文献

- Armstrong, A. J. and Siegfried, W. R. 1991. Consumption of Antarctic krill by minke whales. *Antarctic Science* 3(1):13-18.
- Buckland, S. T. and Cattanach, K. L. 1992. Minke whale abundance in the Northwest Pacific and the Okhotsk Sea, estimated from 1989 and 1990 sighting surveys. *Rep. int. Whal. Commn* 42:387-392.
- Bushuev, S. G. 1986. Feeding of minke whales, *Balaenoptera acutorostrata*, in the Antarctic. *Rep. int. Whal. Commn* 36:241-245.
- Christensen, I. 1981. Age, determination of minke whale, *Balaenoptera acutorostrata*, from laminated structures in the tympanic bullae. *Rep. int. Whal. Commn* 31:245-253.
- Folkow, L. P., Haug, T., Nilsen, K. T. and Nordøy, E. S. 1997. Estimated food consumption of minke whales *Balaenoptera acutorostrata* in Northeast Atlantic waters in 1992-1995. Paper presented to the Scientific Committee of the North Atlantic Marine Mammal Commission Meeting. 26pp.
- 藤瀬良弘. 1995. 北太平洋におけるミンククジラ捕獲調査. 鯨研通信 385:1-8.
- 藤瀬良弘. 1996. 1995年に実施した第2回北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査の航海報告. 鯨研通信 390:1-14.
- 藤瀬良弘. 1997. 1996年北西北太平洋ミンククジラ捕獲調査とこれまでの調査結果について. 鯨研通信 395:1-20.
- Horwood, J. 1990. Biology and exploitation of the minke whale. *Boca Rator Fe.*, CRC Press. 238pp.
- Inoue, M. and Ogura, M. 1958. The swimming-water -depth for anchovy shoals in Tokyo Bay. *Bull. Japan Soc. Sci. Fish.* 24:311-316.
- 石川 創. 1998. 1997年度北西北太平洋鯨類捕獲調査航海記. 鯨研通信 399:6-15.
- Kasamatsu, F. and Tanaka, S. 1992. Annual changes in prey species of minke whales taken off Japan 1948-87. *Nippon Suisan Gakkaishi* 58:637-651.
- Lindstrøm, U., Fujise, Y., Haug, T. and Tamura, T. 1997. A feeding ecology study of habits of minke whales *Balaenoptera acutorostrata* in the Northwest Pacific in July-September 1996. Paper SC/49/NP2 presented to the IWC Scientific Committee, 1997(unpublished). 22pp.
- Lockyer, C. 1981. Estimation of the energy costs of growth, maintenance and reproduction in the female minke whale, (*Balaenoptera acutorostrata*), from the southern hemisphere. *Rep. int. Whal. Commn* 31:337-343.
- Markussen, N. H., Ryg, M. and Lydersen, C. 1992. Food consumption of the NE Atlantic minke whale (*Balaenoptera acutorostrata*) population estimated with a simulation model. *ICES J. mar. Sci.* 49:317-23.
- Miyashita, T. and Shimada, H. 1994. Minke whale abundance in the Okhotsk Sea, the Sea of Japan and off the Pacific coast of Northern Japan estimated from sighting data. Paper SC/46/NP6 presented to the IWC Scientific Committee, June 1994 (unpublished). 9pp.
- Miyashita, T. and Fujise, Y. 1997. Abundance estimate of the Western North Pacific minke whale in sub-area 9 with notes on the results of dedicated surveys. *Rep. int. Whal. Commn*

- 47:543-551.
- 中明幸広. 1997. 道東太平洋における浮魚類漁獲量の長期変動. 水産海洋研究 61:89-91.
- 農林水産省北海道統計情報事務所編. 1997. 北海道農林水産統計年報 (水産編). 平成7年. 140pp.
- Ohsumi, S. 1980. Minke whales in the coastal waters of Japan, 1978. *Rep. int. Whal. Commn* 30:307-311.
- 田村 力. 1997. ヒゲクジラ類、特に南半球産ミンククジラの食性と摂餌量について. 鯨研通信 396:6-12.
- 田村 力. 1998. 北西北太平洋および南極海におけるミンククジラの摂餌生態に関する研究. 北海道大学博士論文. 125pp.
- Tamura, T., Fujise, Y. and Shimazaki, K. 1998. Diet of minke whales *Balaenoptera acutorostrata* in the Northwestern Part of the North Pacific in summer, 1994 and 1995. *Fisheries Science* 64(1):71-76.
- Wada, T. and Kitakata, M. 1982. Sampling research with mid-water drift gillnet and behavior of saury in the daytime. *Bull. Hokkaido Reg. Fish. Res. Lab.* 24:311-316.

絶滅の危機を救った捕鯨ボート「レスキュー」 —カリブ海、ベクウェイ島の捕鯨の現在—

浜口 尚 (園田学園女子大学短期大学部)

1. 序

1993年3月、カリブ海、ベクウェイ島(Bequia)の鯨捕りの家で筆者は生まれて初めてザトウクジラ肉を味わった。「好きだけ食べなさい」と言われ、とにかく夢中で山盛りとなった一皿を食べ尽くした。おいしかったかどうかについては定かではないが、その夜、下痢に見舞われたことだけは記憶している。多分、脂肪分が消化しきれなかったせいであろう。それから5年経った1998年3月、再びザトウクジラ肉を賞味しえた。今回は下痢もなく十分に堪能した。美味であった。

本稿で取り上げるベクウェイ島は北緯13度、西経61度15分に位置する面積18.1km²、人口4,874人(1991年)のサンゴ礁に囲まれた小さな島である。ベクウェイ島の北14.5kmに位置するセント・ヴィンセント島及びベクウェイ島を含む30余りのグレナディーン諸島北部の島々が一つの独立国「セント・ヴィンセント及びグレナディーン諸島」(St. Vincent and the Grenadines)を構成している(図1)。

1492年にコロンブスがカリブ海地域に到来して以降、その地は西欧列強の植民地争奪戦の舞台となり、多くの地域で先住民が滅ぼされていった。セント・ヴィンセント島も1783年のヴェルサイユ条約で最終的にイギリス領となるまで支配権はフランス、イギリスの間で揺れ動き、それ以降も先住民カリブ人とイギリス人との争いは続いた。イギリスによるカリブ人の島外追放という苛酷な弾圧にもかかわらず、今日でもセント・ヴィンセント島の一部地域ではカリブ人の子孫たちが暮らしている。

元々は無人島であったベクウェイ島にも17世紀半ば以降フランス人、イギリス人が入植、アフリカ大陸から奴隷を導入して大規模農園によるサトウキビ栽培を進めた。1838年の奴隷解放令以降は、生産効率の悪さからサトウキビ栽培は衰退、島の経済は低迷を極めた。その経済の危機を救ったのがボート建造、島間交易、捕鯨という海上での活動であった。

以下、最新の情報に基づいて¹⁾、一時期ベクウェイ島経済の屋台骨を支え、今日でも島民の精神生活に大きな影響を与えている捕鯨の諸相

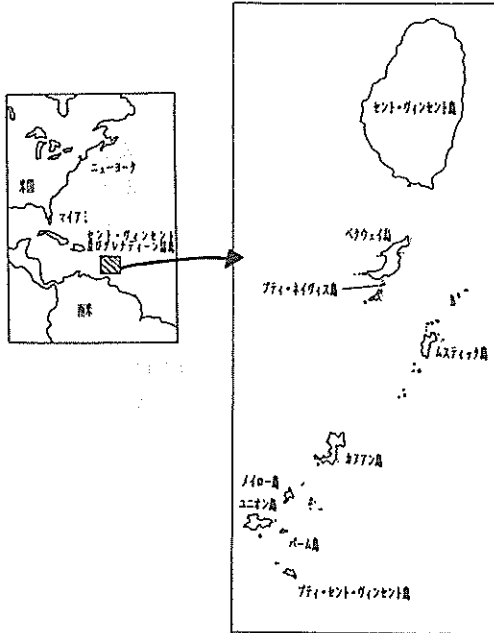


図1. セント・ヴィンセント及び
グレナディーン諸島全図。

を概観してみる。具体的な事例の提示が捕鯨問題のより良き理解に通じ、捕鯨文化の擁護継承に多少なりとも貢献すると考えるからである。

2. 捕鯨の歴史

2.1 捕鯨一族オリヴィエール家

1860年代にアメリカ捕鯨船に見習い水夫として乗り組んだベクウェイ島の資産家の息子ウィリアム・トーマス・ウォレス・ジュニアは後に中古の捕鯨ボート2隻を購入、1875年にベクウェイ島フレンドシップ湾西岸の所有地に解体処理施設を建築し、捕鯨事業に着手した(Ward, 1995)。

同じくベクウェイ島の資産家であったジョーゼフ・オリヴィエールも1880年代にベクウェイ島の南東岸から少し離れたところに位置する無人島プティ・ネイヴィス島に解体処理施設を建設、ウォレスに追随した(Ward, 1995)。

この両者によって創始されたベクウェイ島の捕鯨事業はその後両家一族によって受け継がれ、今日(1998年)でもオリヴィエール一族の4世代目、5世代目の手によって事業が続けられ

ている。以下、オリヴィエール一族を通してベクウェイ島の捕鯨の歴史をみってみる(図2)。

1880年代にオリヴィエール家では捕鯨事業は創始者ジョーゼフ・オリヴィエールから長男Aに、さらにAからAの弟B(ジョーゼフの二男)とAの四男Eに引き継がれた。一方、ほぼ同時期にジョーゼフの六男CとAの二男Dがベクウェイ島とプティ・ネイヴィス島の間位置する小岩礁サンプル・ケイに解体処理施設を建築、ベクウェイ島で3番目の捕鯨事業を開始した。やがてDはグレナダ、カイユ島での捕鯨事業に参加するためにベクウェイ島を去った。サンプル・ケイでの捕鯨事業は後にCからCの三男Hと七男Iに受け継がれた(Ward, 1995)。

このH、Iこそベクウェイ島の鯨捕りの間で語り継がれている伝説的な銚手である。後述する現代の銚手アスニール・オリヴィエールはHを「最上の銚手」、Iを「立派な銚手」と称えている。同じく後述する銚手NもHを「史上最高の銚手」と絶賛、彼が知り得る範囲内の銚手の力量のランクを「1位H、2位アスニール、3位I」としている。

今日、各種の雑誌や論文において実名で「最後の銚手」として紹介され、ベクウェイ島では写真入りの絵葉書も販売され、また彼にちなんで命名された「アスニール・ビーチ」も存在する(これらの理由から匿名にはしなかった)アスニール・オリヴィエールは1921年に父G(Cの二男)の五男として誕生、1950年代の終わり頃から捕鯨ボートに乗り始めた。この時期、捕鯨事業はアスニールの叔父H、Iが保有しており、父Gは主として鯨肉の販売を担当していた。アスニールは銚手として活躍していた叔父H、Iからではなく一般の乗組員として捕鯨に携わっていた伯父F(Cの長男)から捕鯨についての手ほどきを受けている。

1958年2隻の捕鯨ボート「ダート」と「トリオ」が建造され、アスニールは「トリオ」の艇長(キャプテン)、銚手を歴任した。彼が「トリオ」の艇長を務めていた時期、銚手はウィリアム・トーマス・ウォレス・ジュニアの孫が務めていた。1961年アスニールは「トリオ」の銚手として初めて鯨を仕留めた(Ward, 1995)。

1961年漁期終了時にアスニールは3人の兄

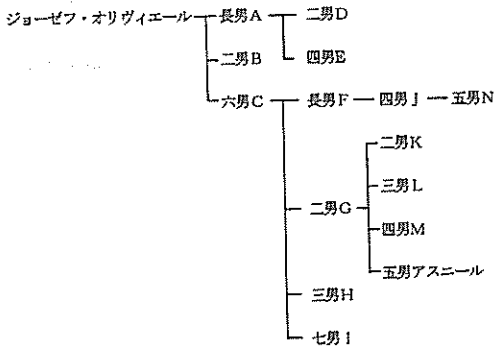


図2. オリヴィエール一族家系図。

K、L、M (Gの二、三、四男) と共に捕鯨事業に出資・参画した。同年、プティ・ネイヴィス島に新しい解体処理施設が建築され、鯨の加工処理はサンプル・ケイから創業の地プティ・ネイヴィス島で再び行われるようになった (Ward, 1995)。

やがて捕鯨事業(解体処理施設と捕鯨ボート)はアスニールと3人の兄たちに引き継がれた。3人の兄のうち、K、Lは捕鯨ボートに乗ったが、Mは出資だけで捕鯨には直接従事しなかった。1983年に「トリオ」の交替用ボート「ホワイ・アスク」が建造され、引き続きアスニールが船手を務めた。1989年「ダート」が売却され、1990年より捕鯨ボートは「ホワイ・アスク」1隻となった。

1980年代半ばより捕鯨ボート乗組員欠員時の補充メンバーとして捕鯨を手伝い始めていたN (アスニールに捕鯨の手ほどきをしたFの孫) は1991年に「ホワイ・アスク」の正式乗組員となった。Nの父J (Fの四男)も過去30余年捕鯨ボートの一般の乗組員として捕鯨に従事していた経験があり、Nは父と同居し、家庭では父Jから、現場ではアスニールから捕鯨について学んだ。

アスニールのもとで乗組員として5年間修行を積んだNは1996年初めに自らの捕鯨ボート「レスキュー」を父Jの協力を受けて完成させ、同年より船手として自らのボートに乗っている (図3)。アスニール自身はまだ正式には引退していないが、77歳の彼には船手の仕事は少々き

つい。捕鯨の中心は創始者ジョーゼフから数えて5世代目、43歳(1955年生)のNに移ったと言える。

この船手N率いる「レスキュー」が、1998年2月26日にザトウクジラ2頭の捕獲に成功し、1994年から1997年までの4年間捕獲ゼロに終わっていたベクウエイ島の捕鯨の危機を救ったのである (図4)。

2.2 捕獲数の変遷

では、ベクウエイ島で捕鯨が開始されて以降今日までの百数十年間にどれぐらいのザトウクジラが「捕獲」されたのであろうか²⁾。正確な統計資料が残っていない以上、数値を確定することは極めて困難であるが、その輪郭を描くことは可能である。

例えば、プライスは鯨油輸出統計から捕獲数の推計を試みている。それによると、1898年から1938年までの41年間にセント・ヴィンセントから鯨油27万8369ガロン (1ガロン=約4リットル) が輸出されている (Price, 1985)。プライスによれば、1頭の成体ザトウクジラからは大体1000ガロンの鯨油を精製できるので、単純計算すれば同期間に279頭捕獲されたことになり、年間平均捕獲数は6.8頭となる。

一方、アダムスは1890年から1925年までの36年間にセント・ヴィンセントから鯨油が約50万ガロン輸出されたとしている (Adams, 1975)。同様の計算を行えば、同期間中の捕獲数は500頭となり、年間平均捕獲数は13.9頭である。当該期間はベクウエイ島の捕鯨の最盛期を中心とした時期であるので、衰退期分を含むプライスの数値よりは当然大きくなる。

また、プライスは自らの調査から1950年から1984年までの35年間に44頭捕獲 (これに加えて10頭船打ち亡失) されたとしており (Price, 1985)、年間平均1~2頭の捕獲である。

筆者自身の調査では1987年以降1998年までの12年間の捕獲数は8頭 (これに加えて3頭船打ち亡失) であり (表1)、平均すれば3年間に2頭の捕獲である。当該期間は乗組員の高齢化、捕鯨ボートの減少期(1990年~95年は1隻のみ) が重なり合った時期で、近年稀にみる低迷期であったかもしれない。

しかしながら、1996年に新たな捕鯨ボートが進水、新ボートの乗組員は銛手を含めてかなり若返っており、上述のとおり1998年漁期には新ボートが2頭の捕獲に成功している。この5年振りの成功が捕鯨関係者に新たな事業意欲を与え、捕鯨を活性化したことは確かである。「レスキュー」の今後の活躍に期待したい。

3. 捕鯨の現況

ベクウェイ島の捕鯨は、ベクウェイ島とムスティック島間の海域をザトウクジラが繁殖場に向けて南下していく2月上旬に始まる。2月上旬の日曜日に英国国教会の司祭によって捕鯨ボートに祝福がなされ、乗組員の安全と捕鯨の成功が祈願され、出帆となる。捕鯨期間は同海域をザトウクジラが北上していく5月上旬まで続く。但し、捕獲枠2頭が充足されれば、その時点で捕鯨は終了となる。1998年漁期は2月末に2頭が捕獲されたため僅か2週間余りで捕鯨は終わった。

3.1 捕鯨ボートと捕鯨道具

現在ベクウェイ島で使用されている捕鯨ボートは「ホワイ・アスク」と「レスキュー」の2隻である。両ボートとも全長27フィート(8.2m)、幅7フィート(2.1m)と言われているが、砂浜に両ボートが並べられているのを見ると、後者の方が全体的に幾分か大きい。ちなみに、後者の実測値は長さ8.25m、幅2.17m、深さ1.04mであった。「レスキュー」の場合、所有者によればその建造費用は約3万ECドル(138万円、1996年1ECドル=46円)であった。

ベクウェイ島の捕鯨ボートの原型であるナンタケット型捕鯨ボートは全長28~30フィート(8.5~9.1m)あり、それよりは少し小さいが、ウォレスが捕鯨を開始した当時の捕鯨ボートは全長25~26フィート(7.6~7.9m)しかなく(Adams, 1971)、それよりは少し大きくなっている。

1950年代の終わり以降今日まで40年近く捕鯨に従事し、「ホワイ・アスク」の所有者・銛手であるアスニール・オリヴィエールによると、過去数十年間に何度か銛を打ち込んだ鯨に捕鯨

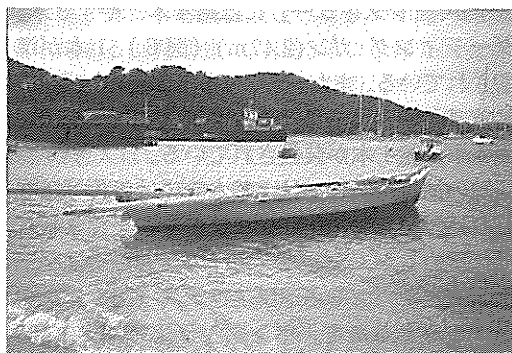


図3. 捕鯨ボート「レスキュー」：1996年建造。このボートで1998年2月、ザトウクジラ2頭を捕獲。

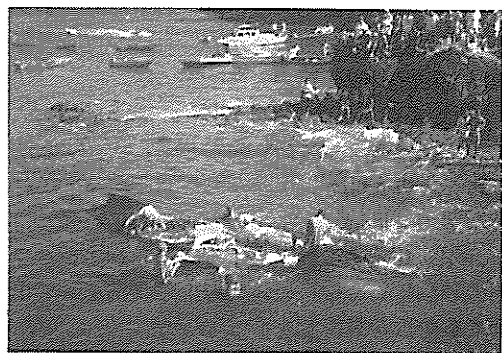


図4. 解体されるザトウクジラ(1998年2月27日) Alvin Ollivierre提供。

表1. ザトウクジラ捕獲数一覧(1987~1998年)。

1987	1988	1989	1990	1991	1992
2	1	0	0	0	1
1993	1994	1995	1996	1997	1998
2	0	0	0	0	2

(注) これに加えて、1988年、1992年、1996年にそれぞれ銛打ち亡失鯨が1頭ずつある。

ボートごと海中に引きずり込まれたことや鯨の背中から捕鯨ボートが跳ね上げられ、ひっくり返されたこともある。このような経験をもとに捕鯨ボートにも改良が加えられ、百数十年前より幾分か大きく強固にされている。

「ホワイ・アスク」には銛(3m)4本、やす(3.8m)3本、ショルダー・ガン(94cm)(図5)

2丁が、「レスキュー」には銚4本、やす3本、ダーティング・ガン(2.47m) (図6) 1本が準備されている。また、両ボートそれぞれに主帆、船首三角帆、オール5本、舵取りオール1本、櫂4本、舵1本が装備されている。

鯨の捕獲に際しては、基本的には手投げ銚を打ち込み鯨を弱体化させた後、やすを突き刺して仕留めるが、ショルダー・ガンもしくはダーティング・ガンでポンプ・ランス(図7)を発射する場合もある。ポンプ・ランスは1本400ECドル(1万8400円)と高価なため、撃ち損じた場合の損失を考慮して慎重に使用の可否を決定する。

ダーティング・ガンはショルダー・ガンより一昔の前の道具であり、銚の柄の部分にポンプ・ランス発射筒が取り付けられており、銚が鯨に突き刺さると留め金が押されポンプ・ランスが発射される仕組みになっている。

3.2 捕鯨従事者の仕事と役割

捕鯨従事者は2月上旬から5月上旬までの捕鯨期間中、日曜日・祝日と悪天候の日を除く毎日、午前6時頃にベクウェイ島フレンドシップ湾の砂浜に集合し、天候や海上の状況のみて出漁するか否かを決定する。

出漁する場合は6時30分頃に6人乗りの捕鯨ボートで出帆し、約13km離れたムスティック島を目指す。8時頃同島に到着、捕鯨ボートを海岸に係留し、乗組員は高台に登り、そこで待機する。待機中は、交替で双眼鏡を用いて海上の鯨を探索、その傍ら往路釣り上げた魚でスープを作り、持参したパンで朝食を取る。

一方、ベクウェイ島の高台には見張り及び協力者(場合によっては捕鯨ボート乗組員)が残り、双眼鏡で探鯨する。鯨が発見されれば、マリン・トランシーバーで捕鯨ボートに発見の連絡がなされ、追跡が開始される。鯨が首尾よく捕獲されれば、フレンドシップ湾の鼻先に位置するプティ・ネイヴィス島の解体処理施設にエンジン付きボートで曳航され、そこで解体される。約3か月間の捕鯨期間中、このような日々が続く。

捕鯨ボートには6人が乗り組む。各々の名称は、船先から艦に順番に、①銚手(ハーブナー)、

②ボウ・オールズマン、③ミッドシップ・マン、④タブ・オールズマン、⑤リーディング・オールズマン、⑥艇長である。

オールでの漕艇時には左舷側に①③⑤の3人、右舷側に②④の2人が座り、⑥は艦で舵取りオールを漕ぐ。従って、オールは右舷側に3本、左舷側に2本出ていることになる。帆走時には進行方向に合わせて片側に①～⑤の5人が座り(もしくは立ち)、⑥は艦で舵を取る。

銚手は鯨の捕獲に関して絶対的な権限を有している。鯨の背後約3mまで近づき、手投げ銚を打ち込み、海上でのナンタケット・スレイライド(銚を打ち込んだ鯨に捕鯨ボートごと引っ張り回されること)の後、弱った鯨に必要なとあればポンプ・ランスを撃ち、最後に鯨の背中に飛び移り、止めのやすを刺し込む。

ボウ・オールズマンは銚手の言ったことを正確に艇長に伝える役目があり、銚手が鯨に銚を打ち込んだ時に、スプリット(主帆を斜めに張り出すための小円材)を下ろす。その後、2番銚、3番銚にロープを繋ぎ、銚、やす、ショルダー・ガンを銚手に手渡す。銚手が銚を投げた時に、ロープがもつれないようにしておくのも彼の重要な仕事である。鯨が捕獲された時には海中に入り、鯨が海水を飲み込んで沈まないようにその口を縫い合わせる。

ミッドシップ・マンは帆走時に風向きに合わせて船首三角帆を操作する。また、銚手が鯨に銚を打ち込んだ時に、船首三角帆を小さく巻き上げて倒す。鯨が捕獲された時にはボウ・オールズマンと共に海中に入り、鯨の口を縫い合わせる。

タブ・オールズマンは銚手が鯨に銚を打ち込んだ時に、ロープの入っている桶(タブ)の蓋を外し、ロープが引き出されていくようにする。また、鯨がロープを引っ張る際に生じる摩擦熱を減じるために銚綱柱に巻かれたロープに海水をかける。

リーディング・オールズマンは銚手が鯨に銚を打ち込んだ時、主帆の帆脚索を取り外し、主帆を小さく巻き上げて倒す。また、ボウ・オールズマンの求めに応じて、ロープ、ショルダー・ガン、ポンプ・ランス等を船尾から取り出し、ボウ・オールズマンに手渡す。さらに、艇

長の指示に従ってバラストを慎重に動かすと共に、適宜ボート内に溜まった水垢をくみ取る。

艇長は艫で舵を取り、主帆を調整し、ボートの運行に関して全責任を負う。銚打ち後、ロープを素早く銚縄柱に巻き付ける。また、2番銚以下の銚が打ち込みやすいように、鯨とボートの距離を一定に保つ。なお、かつては銚手が銚を打ち込んだ後、艇長と銚手が場所を交替し、艇長がやすもしくはポンプ・ランスで鯨を仕留めていたが、今日では銚手が仕留める。

銚手及び艇長は銚打ち、操船に関して高度の技術を要求されるが、②～⑤の乗組員については漁師としての技量があれば、現場での訓練によって十分務まるようである。一般的に見習い乗組員は、⑤リーディング・オールズマンとして捕鯨ボートに乗り組み、④タブ・オールズマン、③ミッドシップ・マン、②ボウ・オールズマンと一つずつ地位を昇格していく。②ボウ・オールズマンは見習い銚手に当たり、銚手の背後でその銚打ちの技能を学ぶ。

前述の「レスキュー」の銚手Nは、1991年にアスニール・オリヴィエールの捕鯨ボート「ホワイ・アスク」にタブ・オールズマンとして参加、翌1992年から1995年までボウ・オールズマンを務め、1996年に自らの捕鯨ボート「レスキュー」を建造、銚手として独立した。また、「レスキュー」の艇長Oはかつて「ダート」の艇長を務めたことのあるベテランで（1936年生）、操船技術に関しては全幅の信頼が置かれている。

一方、「レスキュー」のボウ・オールズマンPは、1992年から1995年まで「ホワイ・アスク」のタブ・オールズマンを務め、1996年に「レスキュー」のタブ・オールズマンとなり、1998年にボウ・オールズマンに昇格した。同じく「レスキュー」のミッドシップ・マンQは、1996年に「レスキュー」のリーディング・オールズマンとして初めて捕鯨ボートに乗り組み、1998年にミッドシップ・マンに昇格した。このP、Qはそれぞれ1970年、1974年生まれで、乗組員の中では最も若い世代である。

40歳台の伸び盛りの銚手、60歳台のベテランの艇長、それに20歳台の体力のある乗組員と、「レスキュー」は理想の陣容を誇り、1998年春

に見事にザトウクジラ 2頭の捕獲に成功したのである。

3.3 鯨肉の分配法-シェア・システム-

ペクウェイ島の捕鯨においては賃金の支払いは行われておらず、「シェア・システム」に基づく分配が慣行となっている。捕獲された鯨はプティ・ネイヴィス島の解体処理施設で解体され、鯨肉、脂皮(blubber)ごとに樽に入れられ、各人に分配される。以下は、1998年の分配事例である。

鯨肉は18等分され、ボート所有者(2人)が2配分ずつ、乗組員(12人)が1配分ずつ、見張り及び解体処理施設保有者が1配分ずつ受け

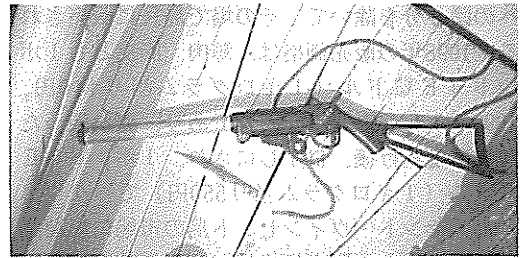


図5. ショルダー・ガン。



図6. ダーティング・ガン。

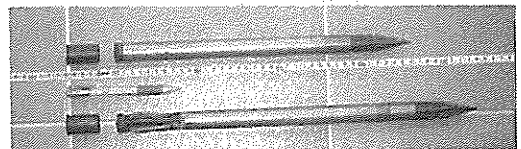


図7. ポンプ・ランス。

上(36cm) —ダーティング・ガン用—

下(44cm) —ショルダー・ガン用—

取る。

一方、脂皮は3等分され、ボート所有者（2人）が1配分、「士官（オフィサー）」と称される銚手（2人）及び艇長（2人）が1配分、他の乗組員（8人）、見張り及び解体処理施設保有者が1配分を受け取る。2人のボート所有者は1配分を2等分、4人の士官は1配分を4等分、他の乗組員、見張り、解体処理施設保有者等10人は1配分を10等分する。

銚手及び艇長は鯨肉に関しては他の乗組員と同量の配分であるが、脂皮に関してはより多くの配分を受け取る。これは、かつては脂皮から鯨油を精製輸出し、その売り上げが捕鯨事業の中核を占めていたことを反映している。

各人の取り分は、自家消費分及び親族・友人への贈与分を除いて、その場で島民に販売される。1998年の販売価格は、鯨肉、脂皮とも1ポンド4 E Cドル（1キログラム当り440円、1998年1 E Cドル=50円）であり、売れ残った鯨肉は塩漬後、日干しにされ、1ポンド5 E Cドル（1キログラム当り550円）でベクウェイ島、セント・ヴィンセント島の市場に出荷される。これらの販売価格は1993年の前回捕獲時から変動していない。

このシェア・システムによる鯨肉の分配と贈与及び現金販売による再配分が島中に鯨肉を行き渡らせることを可能にしており、地域社会の捕鯨文化の維持・継承に大きな役割を果たしている。ベクウェイ島民は数年に一度でも鯨肉を食することによって捕鯨の島の住民であるということを再認識するのである。

1998年2月末、ベクウェイ島でザトウクジラが捕獲されたことを聞いたセント・ヴィンセント島の住民が生鯨肉を入手しようとしてベクウェイ島に渡って来たが、その多くは入手できなかった。現金販売されているからといって誰もが購入できるわけではない。ベクウェイ島民と何らかのつながりを持ち、幾分なりとも捕鯨文化を共有していない限り、生の鯨肉は入手できないのである。捕鯨従事者にとって現金は重要であるが、それが全てではない。本当に必要とする人々に（販売を含めて）分け与えてこそ、お互いに精神的充足感を得るのである。

ところで、1966年にベクウェイ島で現地調査

を実施したアダムスによれば、当時のシェア・システムは次のとおりであった。

脂皮については、3分の1が捕鯨事業体経営者に、他の3分の1が士官、すなわち銚手と艇長に、残りの3分の1が他の乗組員に分配される。一方、鯨肉については4分の1が捕鯨事業体経営者に、残りの4分の3が全乗組員及び捕鯨事業関係者に分配される（Adams, 1971）。

以下、筆者の調査とアダムスの調査にみられる差異について考えてみる。脂皮については、全体が3等分されることは同じである。かつては捕鯨事業体経営者が捕鯨ボート及び解体処理施設を保有、捕鯨事業を運営していたが、今日では若干様相が変化している。銚手アスニールは捕鯨ボート及び解体処理施設の一部権利を保有しているが、銚手Nは捕鯨ボートのみである。この2人のボート所有者が捕鯨ボートの建造・修理費や、銚、やす等の捕鯨道具のほとんど全て（ポンプ・ランスの薬莖代を除く）を負担している。一方、解体処理施設は1961年の建築以来ほとんど手が加えられておらず、維持管理費用もほとんど不要である。従って、今日ではボート所有者の手で捕鯨事業が運営されている状態であり、捕鯨事業体経営者の取り分がボート所有者の取り分になったと考えられる。その代わりに解体処理施設保有者は謂わば解体処理施設使用料として3分の1配分の一部を受け取るのである。

鯨肉についての捕鯨事業体経営者の取り分4分の1、乗組員等の取り分4分の3については、十分に比較検討する資料を持ちあわせていない。今日、ボート所有者は18分の4配分を受け取っており、結果として、取り分8（約22%）は捕鯨事業体経営者のかつての取り分（25%）とほぼ同じとなっている。

30年前と今日を比べてみれば、捕鯨を取り巻く社会状況は大きく変化し、鯨油の輸出は不可能となった。その結果、脂皮と鯨肉の持つ経済的重要性は逆転し、鯨肉のほうが価値を持つようになった。しかしながら、シェア・システムそのものについては、分配物の受け取り手に若干の変化はあったが、脂皮を重視した当初の姿からほとんど変化していないのである。

4. 捕鯨を巡る国際関係

1982年に開催された第34回国際捕鯨委員会(IWC)年次会議において反捕鯨国及び反捕鯨環境保護団体の多数派工作の結果「商業捕鯨の一時中止」(捕鯨モラトリアム)が決議された。その結果、現在では国際捕鯨取締条約加盟国は「原住民生存捕鯨」を除いて規制対象鯨種の捕獲枠はゼロとされている。(この他、規制対象鯨種であっても科学研究目的のための「捕獲調査」が認められている。)

原住民生存捕鯨とは「原住民による地域的消費を目的とした捕鯨であり、古くからの伝統的な捕鯨や鯨利用への依存が見られ、地域、家族、社会、文化的に強いつながりをもつ、原住民/先住民/土着の人々により、またそれらの人々に代わって行なう捕鯨」(フリーマン, 1989)であり、原住民/先住民/土着の人々による鯨肉の地域的消費の重要性が認められているのである。

ベクウェイ島のザトウクジラ捕鯨は、1987年に開催された第39回IWC年次会議において、原住民生存捕鯨として容認され、1987/88年(実質は1988年、以下同様)漁期より年間捕獲枠3頭が設定された。この捕獲枠は1993/94年漁期からは2頭に削減され、今日(1998年)に至っている。

捕獲枠が設定されて以降、捕獲数は枠内に収まっている。捕鯨従事者としてはもう少し(3~5頭)捕獲したいという願望は持っているが、セント・ヴィンセント国政府の指導に従って捕獲枠を遵守している。

彼らの捕鯨法は創業以来この百数十年間ほとんど変わっていない。手漕ぎ・帆推進のボートに手投げ鉆を持ち、体力の続く限りザトウクジラを追う。捕獲に成功する場合もあるし、失敗・転覆する場合もある。まさしく、人と鯨の命を賭けた闘いであり、非難されるところは何もない。

ところが、そう考えない人々もいる。ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨の存在に加えて、セント・ヴィンセント国自体が、国際捕鯨委員会において日本、ノルウェー等の捕鯨政策を支持している関係上、反捕鯨国及び反捕鯨環

境保護団体からの同国及びベクウェイ島の鯨捕りに対する反発は強い。1993年に京都で開催された第45回IWC年次会議において、オランダ代表は鉆手アスニール・オリヴィエールを指して「この老人はいつ死んでもおかしくない⁹⁾」という発言を行って物議を醸した。反捕鯨国及び反捕鯨環境保護団体は動物権は熱心に擁護するが、人権は無視するようである。

反捕鯨国及び反捕鯨環境保護団体はベクウェイ島の捕鯨に関しては「老鉆手1人の捕鯨」ということで、不承不承ながら「彼の引退(死去)を待とう」という姿勢で推移してきた。引退(死去)すればベクウェイ島の捕鯨も自然消滅すると思ったからである。ところが、上述したように同島の捕鯨の中心は既に次の世代に移っている。

アスニール・オリヴィエールの家では数々の嫌がらせの手紙を見せてもらったが、1998年の時点では鉆手Nの家にはそのような手紙は届いていない。反捕鯨環境保護団体及びその影響下にある個人が新世代の捕鯨に対してどのような態度をとるか我々は十分注意していく必要がある。

5. 結語

本稿においてはカリブ海、ベクウェイ島の捕鯨の歴史及びその現況を手元にある最新資料を用いて概観してきた。その規模は小さいかもしれないが、捕鯨の持つ精神・文化的意義は大きい。ザトウクジラが捕獲され、食されてこそ「捕鯨の島・ベクウェイ島」はその存在を主張しうるのである。

今日、カリブ海地域の島々の多くは欧米諸国の避寒地として西洋文化に同化を強いられている。その中にあって観光地でありながら、また捕鯨地でもあるベクウェイ島は異色の存在である。外貨を稼ぐ観光と伝統文化である捕鯨とを何とか折り合いをつけようとして苦悩している、そんな一面を持つ島でもある⁹⁾。

1999年の第51回IWC年次会議はベクウェイ島からグレナディーン諸島を介して南に島伝いに繋がる隣国グレナダで開催される予定になっている。これを機会に、本稿を参考としてカリブ

海の捕鯨の島の実情を知り、地域社会における捕鯨文化の意義を理解していただければ筆者としては幸甚である。

6. 注

- 1) ベクウェイ島での現地調査は1991年2月、1993年3月、1994年5月、1997年3月、1998年3月に計41日間実施した。
- 2) 本稿においては、銚打ち陸揚げされた鯨を「捕獲」として取り扱い、銚打ち亡失鯨は捕獲数から除外する。現地の人々にとっては鯨は陸揚げされない限り、意味を持たないからである。
- 3) 筆者は別稿において捕鯨ボート1隻当時(1993年)のシェア・システムについての報告を行っている(浜口, 1995)。そこにおいては、解体処理施設保有者の取り分に関して、今回の報告と異なる部分がある。それは、当時の筆者の聞き取りの不十分さによるものである。
- 4) 『朝日新聞』1993年5月13日付。
- 5) ベクウェイ島における観光開発については拙稿(浜口1995, 1996)を参照のこと。

7. 引用文献

- Adams, J. E. 1971. Historical Geography of Whaling in Bequia Island, West Indies. *Caribbean Studies* 11(3): 55-74.
- Adams, J. E. 1975. Primitive Whaling in the West Indies. *Sea Frontiers* 21:303-313.
- フリーマン, M. 1989. くじらの文化人類学—日本の小型沿岸捕鯨—(高橋順一他訳). 海鳴社, 東京. 217pp.
- 浜口尚. 1995. 捕鯨文化の継承と観光開発—カリブ海、ベクウェイ島の事例より—. 70-86. 合田瀧他編 民族誌の現在—近代・開発・他者—. 弘文堂, 東京. 217pp.
- 浜口尚 1996. カリブ海、ベクウェイ島における観光開発の一側面. 和歌山地理 16:40-43.
- Price, W. S. 1985. Whaling in the Caribbean: Historical Perspective and Update. *Rep. Int. Whal. Commn* 35:413-420.
- Ward, N. F. R. 1995. *Blows, Mon, Blows!: A History of Bequia Whaling*. Gecko Productions, Woods Hole, Massachusetts. 56pp.

日本鯨類研究所関連トピックス (1998年9月～11月)

第1回「人と鯨研究会」の開催

9月4日当研究所会議室において、標記研究会の第1回研究会が開催された。研究会では、水産庁漁政部・小松漁業交渉官より「国際捕鯨委員会(IWC)運営の問題点と課題」と題する話題提供を基にして参加者間での討議がなされた。この研究会では捕鯨問題の文化的、社会・経済的、倫理的、法的側面を検討し、その成果はIWC対応を含む当研究所の諸活動に生かされる。

平成10年度第1回広報企画委員会の開催

9月8日当研究所会議室において、平成10年度第1回広報企画委員会が開催された。委員会

では、水産庁担当官より捕鯨を巡る現状が説明された後、当研究所で行っている捕鯨再開に対する諸外国の理解を得ることを目的とした海外広報活動の実績についての報告が行われた。平成10年度の活動の企画立案について委員から事業のあり方について助言をいただいた。また、具体的な提案としては、日本語版ホームページの開設、英語版ホームページの定期的な改訂、資料の効果的な配布方法、一般への啓蒙普及に有効な出版方法などについて貴重な意見が出された。

職員の採用

9月14日付けで、林真人を総務部総務課に職

員として採用した。

当研究所理事会・評議員会の開催

9月17日当研究所会議室において、理事会・評議員会を開催し、平成10年度の事業計画と収支予算案を中心に審議がなされ、可決承認された。

第5次北西太平洋鯨類捕獲調査副産物販売勉強会の開催

9月24日、当研究所会議室において、調査副産物についての、水産庁への販売処理申請に先立ち、流通関係業者、加工業者、消費者代表の参加を得て、販売勉強会を開催して、公共性の高い調査副産物であるので透明性の高い販売を行うこと。また、イベントや即売会を通じて国民に捕鯨問題・鯨食文化等について理解と認識を深めるよう努めるとともに、可能な限り廉価で公平に行き渡るよう努力願うことを依頼した。

NGO会議の開催

10月1日から2日まで海外NGOを招聘してクジラを含む水産資源の持続的利用についての会議が都内で開催された。会議の議題は多岐にわたり、FAO、CITES、IWC、ICCAT関連事項が検討された。当研究所より大隅理事長をはじめ、役職員7名が参加した。

SOWER計画会議の開催

IWCが日本の全面的協力を得て南半球海域で実施している鯨類資源目視調査(IWC/SOWER)の計画会議が、今年も当研究所会議室で10月5日から9日までの間開催された。この会議には、IWC科学委員会議長のバニスター氏を始め海外から7名の関係者と、調査船2隻の乗組員幹部等総勢36名が参加した。1998/99年の調査海域は南極海Ⅲ区とⅣ区で、各々シロナガスクジラとミンククジラを主対象として実施することが、第50回IWCで決定されているが、今回は国際調査員の選考を始め来るべき調査を成功させるための具体策について検討された。

日・中・韓・ロ4ヶ国コミッショナー会議の開催

10月13日から16日まで中国・韓国・ロシアのIWCコミッショナー(代理)が来日、本年2月に続いて日本を含めた4ヶ国間会議が都内で開催された。当研究所は会議事務局を担当した。会議には当研究所より大隅理事長以下役職員10名が会議に参加した。3ヶ国一行は16日に千葉県・和田町、鴨川シーワールドを訪問し、当研究所より大曲研究員及び林所員が同行した。

当研究所の創立記念日

10月30日、当研究所の第11回目の創立記念日を迎え、夕刻、当研究所会議室において役職員による式典とささやかなパーティーを行った。

第12次南極海鯨類捕獲調査船団の出港

11月6日、調査母船・日新丸、標本採集船・勇新丸、第1京丸、第25利丸及び目視専門船・第2共新丸の計5隻の南氷洋鯨類捕獲調査船団は、下関市あるかぼーと岸壁から出港した。今回は9月15日に竣工披露式を終えたばかりの勇新丸が参加している。また、出港式は下関市の絶大なるご支援の下で盛大に執り行われた。

全国くじら伝統芸能祭の開催

11月15日、東京両国国技館において、当研究所も会の一員となっている「捕鯨を守る会」主催の全国くじら伝統芸能祭が開かれ、全国の10市町村からクジラの伝統芸能が参加出演し、披露され、カナダからもヌチャヌスの人たちが参加して、それぞれクジラに関する伝統芸能が披露された。入場者全員にクジラ弁当とハリハリうどんが配られ、鯨食文化も楽しんだ。

北西太平洋調査検討会議の開催

11月16日から18日まで、ノルウェー漁業養殖研究所のハウグ教授等を招聘して北西太平洋調査に関する検討会を当研究所会議室で開催した。ハウグ教授は統計学的モデルを使った海洋の生態系解明の専門家であり、ノルウェーの鯨類調査にも深く係っている。この検討会には当研究所を含め25名の関係者が参加した。

第12次南極海鯨類捕獲調査船団調査母船・日新丸で火災

11月6日に下関港を出港し、12次南極海鯨類捕獲調査に従事するため南下航海中の日新丸が、日本時間の11月19日23時頃オーストラリア東方約1,000kmの海域において、工場区画から火災が発生し、工場区画の天井の電気配線網を中心に延焼。懸命な消火活動等の結果、他への類焼は免れた。また、この火災による負傷者は一人も出さなかった。

当研究所評議員会・理事会の開催

11月27日開催された評議員会において、平成9年度の事業報告並びに収支計算書について審議し、提案通り議決されるとともに理事全員及び監事の任期満了に伴う選任について審議され、守矢氏は日本捕鯨協会の専務に就任するため退任し、他の役員は全員再任された。また、同日開催された理事会において、平成9年度事業報告並びに収支計算書について審議し、提案通り議決されるとともに評議員全員の任期満了に伴う次期評議員の承認の件が諮られ、加藤、

中部、柳原の各氏が退任し、伊藤、国井、藤井の各氏が新たに選任され、他の評議員全員が再任された。なお、新たに選任された理事の互選により、大隅氏が引き続き理事長に選任された。

評議員会及び理事会において、日本鯨類研究所の理事長を務めた後、平成7年12月1日から顧問に就任していた長崎氏が11月30日付けて退任することが報告された。

SOWER調査船の出港

IWC/SOWER調査に就航するため、昭南丸と第2昭南丸が11月28日ケープタウンに向けて広島県瀬戸田町から出港した。両船は12月末にケープタウンでIWCより派遣される8名の国際調査員を乗船させて、先ず南極海Ⅲ区でシロナガスクジラを主対象とした調査を実施し、その後Ⅳ区に移動してミンククジラを主対象にして調査を行う予定になっている。調査は目視活動の他に水中マイクロホンを使用して鯨類の鳴音の記録やバイオブシーサンプルの採集、自然標識撮影、遊泳行動観察などが計画されている。

日本鯨類研究所関連出版物等 (1998年9月~11月)

[印刷物]

当研究所：鯨研通信, 399:28pp. 日本鯨類研究所, 1998/9.

藤瀬良弘：ミンククジラの生態研究を通じた南極海環境研究の展望。月刊海洋 30(9):339, 1998/9/1.

Goodman, D.: Folks had a whale of a time at the celebration. The Washington Times 1998/11/22.

飯野靖夫：改訂管理制度における監視・取締制度をめぐる議論の現状と問題点。鯨研通信, 399:16-22, 1998/9.

石川 創：1997年度北西北太平洋鯨類捕獲調査航海記。鯨研通信, 399:6-15, 1998/9.

Mogoe, T., Fukui, Y., Ishikawa, H. and Ohsumi, S.: Effects of diluent composition and temperature on motility and viability after liquid storage and cryopreservation of minke whale (*Balaenoptera acutorostrata*) spermatozoa.

西脇茂利：1996/97及び1997/98年度鯨類捕獲調査(JARPA)概要。鯨研通信, 399:1-6, 1998/9.

大隅清治：勇気ある決断に敬意。水産タイムス, 1998/10/12.

大隅清治：捕鯨再開のシンボル。みなと新聞, 1998/10/14.

大隅清治：人と鯨が食糧争奪戦 世界漁獲高の6倍を捕食。週刊世界と日本, 1998/10/19.

大隅清治：捕鯨の否定は文化の否定である。日刊水産経済新聞, 1998/11/12.

大隅清治：勇新丸の活躍に大きな期待。水産世界 47(11):63, 1998/11/15.

- 大隅清治(監修・解説): ヴィジュアル・クジラ百科。海 知られざる世界 第3巻: 58-61, NHK出版, 1998/11/25.
- 島 一雄: 竣工は画期的壮挙。水産タイムス, 1998/10/12.
- 島 一雄: 島一雄 I WC 日本政府代表に聞く 健全な方向へリード。みなと新聞, 1998/10/14.
- 島 一雄: 鯨類の合理的な利用が重要課題。日刊水産経済新聞, 1998/11/12.
- 島 一雄: 勇新丸の竣工を祝う。水産世界 47(11):63, 1998/11/15.
- 田中昌一: 鯨の資源、その利用と管理の過去と現在。世界の漁業 第1編 世界レベルの漁業動向: 311-336, 1998/9.
- 田中昌一: 水産資源学総論(増補改訂版)新水産学全集8: 406pp. 恒星社厚生閣, 1998/9/30.
- 山村和夫: 商業捕鯨からの教訓。水産資源・漁業の管理技術: 29-35, 恒星社厚生閣, 1998/10/1.
- 山村和夫: 水産研究のフロントから 財団法人日本鯨類研究所。日本水産学会誌, 64(6): 1063, 1998/11.

[学会発表]

- 石川 創: 日本のストランディングレコードーその特徴と傾向。国立科学博物館自然史セミナー 海棲哺乳類ストランディングコーディネーター研修, 1998/11/27.
- Martinez, I. and Pastene, L.A. :RAPD typing of North Atlantic and western North Pacific minke whales, *Balaenoptera acutorostrata*. The International Council for the Exploration of the Sea (ICES), Annual Science Conference, Cascais, Portugal, 1998/9.
- Nishiwaki, S., Matsuoka, K., Hakamada, T. and Kasamatsu, F. : Yearly changes in the Distribution and abundance of Humpback whales in the Antarctic (70E-170W). SCAR VII International Biology Symposium. 1998/8-9.

[放送・講演]

- 守矢 哲: 七次台おもしろセミナー くじらってなあに?。七次台中学校, 1998/11/21.
- 大隅清治: ヒトとクジラの関わり合いの過去、現在、そして未来。室戸市民講座 室戸市役所講堂, 1998/9/14.
- 大隅清治: 鯨の利用の現在と将来。下関くじら食文化を守る会 東京第1ホテル, 1998/11/5.
- 大隅清治: コミュニティ・アラカルト。コミュニティFM放送, 1998/11/13.

[新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・初の「全国くじら伝統芸能祭」11月15日国技館で 捕鯨への理解訴える 捕鯨を守る会: みなと新聞 1998/9/1.
- ・新刊紹介 長崎福三氏「システムとしての森-川-海」: 日刊水産通信 1998/9/8.
- ・”鯨の食文化”を市民に 鯨肉即売やビデオ上映など 熊本・玉名市の商店街イベントにマルホが参加: みなと新聞 1998/10/8.
- ・捕鯨再開へのシンボル きょう「勇新丸」が竣工 共同船舶26年ぶりの捕鯨新造船: みなと新聞 1998/10/12.
- ・勇新丸、きょう引渡し 共同船舶、新造の調査・取締船: 日刊水産経済新聞 1998/10/12.
- ・ちょっと一言 新しい捕鯨へ「勇新丸」に期待 共同船舶(株)高山武弘氏: 日刊水産経済新聞 1998/10/12.
- ・新たな時代の、新たな捕鯨へ 漁業調査兼取締船 勇新丸(720トン)、きょう竣工 最新の設備と高性能誇る: 水産タイムス 1998/10/12.
- ・共同船舶の調査船「勇新丸」が竣工 生態系調和捕鯨をめざす: 日刊水産通信 1998/10/12.

- ・共同船舶（株）調査・取締船「勇新丸」（720トン）完成：みなと新聞 1998/10/14.
- ・全国発 捕鯨再開へ熱いエール 「勇新丸」の活躍に期待します：みなと新聞 1998/10/14.
- ・日中韓口IWC政府代表 非公式会合始まる：みなと新聞 1998/10/14.
- ・日中韓口IWC政府代表非公式会合 協力体制や枠組み議論 15日まで東京で：日刊水産経済新聞 1998/10/14.
- ・日中韓口IWC代表 第二回の非公式協議：日刊水産通信 1998/10/14.
- ・宮城クジラ食文化を守る会を17日仙台で：みなと新聞 1998/10/15.
- ・くじら伝統芸能祭開催要項：日刊水産経済新聞 1998/10/15.
- ・来月15日 全国くじら伝統芸能祭 東京で：日刊水産経済新聞 1998/10/15.
- ・調査兼取締船・勇新丸が完成 きょう竣工 共同船舶：日刊水産経済新聞 1998/10/15.
- ・捕鯨再開のシンボル「勇新丸」披露 各界から700人、一般公開も 共同船舶：みなと新聞 1998/10/16.
- ・26年ぶりに捕鯨船新造：朝日新聞 1998/10/16.
- ・「勇新丸」の竣工披露 共同船舶 26年ぶり新造捕鯨船：日刊水産経済新聞 1998/10/16.
- ・記者席 捕鯨再開へ明るい見通し強調：日刊水産経済新聞 1998/10/19.
- ・来月開催、チケット発売 全国くじら伝統芸能祭：日刊水産経済新聞 1998/10/19.
- ・勇新丸を披露 26年ぶり捕鯨船新造：水産タイムス 1998/10/19.
- ・共同船舶が「勇新丸」を竣工披露 捕鯨問題前進のシンボル 700名が出席26年ぶりの新船祝う：日刊水産通信 1998/10/19.
- ・日中韓口IWC代表 13～15日、第二回非公式会合 オホーツク海鯨資源共同調査など合意：日刊水産通信 1998/10/20.
- ・全国くじら伝統芸能祭 チケットの販売を開始：日刊水産通信 1998/10/20.
- ・オホーツクで共同調査 ミンククジラ 第2回日中韓口IWCコミッショナー非公式会合：日刊水産経済新聞 1998/10/20.
- ・商業捕鯨再開アピール 第5回宮城県クジラ食文化を守る会：日刊水産経済新聞 1998/10/20.
- ・日中韓口IWC政府代表非公式会合 具体的な調査項目設定：みなと新聞 1998/10/20.
- ・資源管理型捕鯨再開をアピール 宮城クジラ食文化を守る会：みなと新聞 1998/10/20.
- ・反捕鯨団体とにらみ合い続く ミマカ族伝統捕鯨めど立たず：みなと新聞 1998/10/20.
- ・人工衛星で鯨生態調査 資源量把握で捕鯨理解を期待 水産庁：みなと新聞 1998/10/20.
- ・日中韓口IWC非公式会合 政府代表出席者：みなと新聞 1998/10/20.
- ・第二IWC機構設置に理解得る 日中韓露IWCコミッショナー会合：新水産新聞 1998/10/21.
- ・新捕鯨船「勇新丸」を披露 共同船舶：新水産新聞 1998/10/21.
- ・下関くじら食文化を守る会 機関誌「いさな」創刊：みなと新聞 1998/10/21.
- ・ここで鯨肉売っています 取扱店PRステッカー作製 築地・くじら食文化を守る会：みなと新聞 1998/10/22.
- ・鯨肉282トン、26日から販売 日鯨研、ミンククジラ100頭分：日刊水産経済新聞 1998/10/23.
- ・第5次北西太平洋鯨類捕獲調査の副産物 鯨研が26日から販売：みなと新聞 1998/10/23.
- ・鯨肉販売概要を公表 日本鯨類研究所：日刊水産通信 1998/10/26.
- ・オホーツク海で調査 日中韓露がミンク鯨で：水産タイムス 1998/10/26.
- ・クジラ”復活” 漁師ら困った サンマなどの漁獲に影響 水産庁「捕鯨再開検討を」：毎日新聞 1998/11/2.
- ・初の「全国くじら伝統芸能祭」15日に国技館で 捕鯨への理解訴える 捕鯨を守る会：みなと新聞 1998/11/2.
- ・各地の鯨芸能披露 カナダからも特別参加 全国くじら伝統芸能祭：みなと新聞 1998/11/2.

- ・北鯨肉を販売中：水産タイムス 1998/11/2.
- ・青鉛筆 下関市で5日、くじら供養祭：朝日新聞 1998/11/6.
- ・調査捕鯨船団きょう出港 下関初めて5隻がそろって：読売新聞 1998/11/6.
- ・鯨調査船団 きょう下関から出港 母船など5隻南氷洋へ：山口新聞 1998/11/6.
- ・初のかじら供養祭 下関で90人参加：山口新聞 1998/11/6.
- ・調査捕鯨船団南氷洋へ出発 下関：山口新聞 1998/11/7.
- ・下関でくじら供養祭 捕鯨再開の願い込め：中国新聞 1998/11/7.
- ・亀山八幡宮で「鯨供養祭」 航海の無事と繁栄を祈り：毎日新聞 1998/11/7.
- ・雑記帳 調査捕鯨船団が出港：毎日新聞 1998/11/7.
- ・調査捕鯨の船団・下関港出港 市民ら盛大に見送り 母港化に膨らむ期待：朝日新聞 1998/11/7.
- ・調査捕鯨船団下関から出港 新造の採集船も：西日本新聞 1998/11/7.
- ・調査捕鯨船が出港 下関：読売新聞 1998/11/7.
- ・日新丸など船団一斉出港 下関から南氷洋鯨類捕獲調査へ：みなと新聞 1998/11/9.
- ・南氷洋鯨類調査 資源の合理的利用へ 下関から5隻出港：みなと新聞 1998/11/9.
- ・震災復興に弾みを ミンク鯨公益販売賑わう 神戸鯨友会中心になり：みなと新聞 1998/11/9.
- ・鯨類調査母船・日新丸6日出港 下関から 新造船・勇新丸も：日刊水産経済新聞 1998/11/9.
- ・勇新丸、初仕事へ出港 南氷洋の鯨類捕獲調査：日刊水産通信 1998/11/10.
- ・記者席 吹き始めに” 追い風” 歓迎：日刊水産経済新聞 1998/11/10.
- ・日新丸船団が下関から出港 第12次南氷洋調査：新水産新聞 1998/11/11.
- ・98/99年度南氷洋鯨類捕獲調査船団が出港：みなと新聞 1998/11/11.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査船団出港トピックス：みなと新聞 1998/11/11.
- ・15日に「全国くじら伝統芸能祭」 捕鯨、文化を一般市民に伝える 東京で：日刊水産経済新聞 1998/11/12.
- ・日本のクジラ伝統芸能と古来食文化を21世紀へ！：日刊水産経済新聞 1998/11/12.
- ・調査船団、5隻揃って出港 捕鯨再開への布石に：日刊水産経済新聞 1998/11/12.
- ・熱気球 全国くじら伝統芸能祭：東京新聞 1998/11/16.
- ・初のかじら伝統芸能祭に3千人 捕鯨再開へ夢膨らませ：みなと新聞 1998/11/17.
- ・記者席 予想上回る来場に恩恵受ける 全国くじら伝統芸能祭：日刊水産経済新聞 1998/11/17.
- ・古来の捕鯨文化披露 全国くじら伝統芸能祭 クジラ弁当も人気：日刊水産経済新聞 1998/11/17.
- ・全国くじら伝統芸能祭3千人が来場し盛況に：日刊水産通信 1998/11/18.
- ・初の「全国くじら伝統芸能祭」大盛況 「捕鯨再開」への夢乗せ喝さい：みなと新聞 1998/11/20.
- ・日本捕鯨母船豪州沖で火災 けが人なし：静岡新聞 1998/11/20.
- ・全国くじら伝統芸能祭 賑やかに開く：新水産新聞 1998/11/21.
- ・島氏の講演会 27日：新水産新聞 1998/11/21.
- ・「全国くじら伝統芸能祭」開催 日本の鯨文化に浸る「捕鯨を守る会」主催：水産タイムス 1998/11/23.
- ・記者席 全国くじら伝統芸能祭：水産タイムス 1998/11/23.
- ・島一雄氏が「21世紀を考える」講演 水産・食料研究所：水産タイムス 1998/11/23.
- ・すいけい時評 クジラは“讀れぬ”もの 「全国くじら伝統芸能祭」で痛感：日刊水産経済新聞 1998/11/24.
- ・捕鯨調査母船で火災、漂流中 甲板員が首つり：読売新聞 1998/11/26.
- ・日新丸で火災発生 豪州東方1千キロ 消化作業で鎮火へ：日刊水産経済新聞 1998/11/26.
- ・復旧作業中 鯨類調査母船・日新丸：みなと新聞 1998/11/26.
- ・ほほ鎮火、自力帰港へ準備 鯨類調査船日新丸年内再出発目指す：みなと新聞 1998/11/27.

- ・あす2隻出港 SOWERなど目視調査へ：みなと新聞 1998/11/27.
- ・火災の日新丸 自力航行できず 最寄港へ曳航、修理へ：日刊水産経済新聞 1998/11/27.
- ・日新丸、日本へ戻し復旧後再出港の方針：日刊水産通信 1998/11/27.
- ・漂着鯨の「赤身」持ち去られる：東京中日スポーツ 1998/11/27.
- ・プロムナード 鯨の戦記－野谷文昭：日本経済新聞 1998/11/28.
- ・鯨類目視調査船2隻が出港：日刊水産経済新聞 1998/11/30.
- ・日新丸 水産庁「調査は継続」 日本で復旧後、再出発へ：水産タイムス 1998/11/30.
- ・漁師の誇りを撮る 映画「鯨捕りの海」に大きな反響：朝日新聞 1998/11/30.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・捕鯨再開へ向けて隠忍自重し着実に準備を進める＝大隅鯨研理事長語る＝：水産界 1998/9.
- ・調査捕鯨の現状 世論に訴えよ 高木財団審議役、仏TV討論に出演：水産界 1998/9.
- ・北西太平洋ミンク調査の成果発表：水産界 1998/9.
- ・鯨研、南氷洋ミンク販売：水産界 1998/9.
- ・11月15日・国技館で 全国くじら伝統芸能祭：水産世界 1998/9.
- ・11月15日に「全国くじら伝統芸能祭」：大水ニューズレター 1998/9/4.
- ・人文学的な面から研究を推進 大隅鯨研理事長：水産週報 1998/9/5.
- ・11月15日「全国くじら伝統芸能祭」捕鯨を守る会 国技館に3,000名を：水産界 1998/10.
- ・SRP、南太平洋鯨類サンクチュアリー支持せず：水産界 1998/10.
- ・長編記録映画 鯨捕りの海：船員ほけん 1998/10.
- ・南氷洋・北太平洋鯨類捕獲調査船団 一般公開「くじらファン1万3千人で賑わう」：いさな 1998/10.
- ・'98-6 キャッチャーボートが下関漁港に帰ってきた：いさな 1998/10.
- ・第5次北西太平洋捕獲調査終了 系統群解明に大きく前進：勇魚通信 1998/10.
- ・カリブ諸国鯨類管理機構設立へ：勇魚通信 1998/10.
- ・新しい捕鯨を切り開くシンボル 調査・取締船「勇新丸」進水式：水産世界 1998/11.
- ・「勇新丸」720トン完成・東京で披露式：水産世界 1998/11.
- ・紙吹雪舞い勇新丸デビュー 第十二次南氷洋鯨類捕獲調査船団出港：水産世界 1998/11.
- ・共同船舶(株) 調査取締船「勇新丸」竣工－26年ぶりの捕鯨船は最新の科学機器を満載－：水産世界 1998/11.
- ・日本鯨類研究所が第五次北西太平洋調査副産物販売 出荷価格赤肉一級キログラム・3270円：水産世界 1998/11.
- ・北西太平洋四ヶ国 日本・中国・韓国・ロシア 第二回IWCコミッショナー意見交換開かる：水産世界 1998/11.
- ・全国くじら伝統芸能祭開催：水産界 1998/11.
- ・世界NOW クジラ集団自殺のなぜ：週刊読売 1998/11/8.
- ・共同船舶 捕鯨調査兼取締船 勇新丸が竣工 10月15日晴海で盛大に披露：水産週報 1998/11/15.
- ・独見独語 みんなで協力し、今まで以上の成果を 共同船舶所属「勇新丸」初代船長 鈴木重男：水産週報 1998/11/15.
- ・500人が勇新丸竣工を祝う 晴海・ホテルマリナーズコートで披露式：水産週報 1998/11/15.
- ・インタビュー 生態系調和捕鯨を推進 高山武弘共同船舶社長：水産週報 1998/11/15.
- ・第2回日中韓露IWCコミッショナー非公式会合：水産週報 1998/11/15.
- ・鯨研で調査副産物を販売：水産週報 1998/11/25.

京きな魚 (編集後記)

鯨研通信400号をお届けします。400号出版までに要した50年間に当研究所大隅清治理事長に振り返って貰いました。

29頁の集合写真は、1959年12月出版の100号に模して企画したものです。故大村秀雄所長を中心に勢揃いされた方は12名で、現在の規模の3分の1ですが、何とそこに現理事長の大隅さんが写っているのです。彼の記事が初めて鯨研通信に載ったのは44号(4頁参照)ということですから、400号出版の挨拶文を書くのに最も相応しい人が最も相応しい場所に座っているような気がしています。

今号に自分の研究について紹介した田村力さんが誕生したのは100号からずっとずっと後のことです。彼は本年8月に挙式した新婚ホヤホヤで、当研究所の最も若いグループに所属しています。現在の鯨研通信は、年4回の季刊誌として発行していますから、このペースで行けば500号の出版は25年後ということになります。400号に掲載した集合写真の内、何名が残っているのでしょうか。田村さんはどのあたりに座っているのでしょうか。

守矢さんが任期終了で当研究所を退任されたために、鯨研通信の編集長のお鉢が私の処に回ってきました。私が初めて鯨研通信と出会ったのは、日本水産㈱に入社した1971年春のことです。当時の鯨類研究所は、(財)日本捕鯨協会の一部に組み込まれており、協会の有力メンバーの一つである日本水産は、鯨類研究所のスポンサーの一社という立場にあったことになりました。そのためでしょう、捕鯨部には新入社員の私にも配分があるほど潤沢に鯨研通信が毎月届けられていました。

ところで、その鯨研通信に親しみを覚えたのは、同年12月の244号を読んだ以降のことです。鯨の卵巣を研究していた鯨研女子職員の記事

で、ウィットに富んだ彼女の巧みな文章に心奪われてしまったのです。その後、機会をみつけて胸躍らせながら鯨類研究所を訪問した処、期待通りの美人で、増々イケてしまったのです。彼女が研究の傍ら鯨研通信の編集をしていると知ったので、それ以降は彼女の面影を文中に探し求めて鯨研通信を熟読する次第と相成った訳です。それから幾星霜、捕鯨産業というスポンサーを失った後に設立された(財)日本鯨類研究所は、鯨研通信を賛助会員に向けた会報と位置付け直し出版を続けてきました。そのためか、近年の鯨研通信は研究所の活動的色彩が強まって、かつて私の心を魅了したような文章に出会うことが減ったような気がしてなりません。今回、女子大で教鞭をとられる浜口尚氏の論文を掲載させて頂きましたが、氏は和歌山県庁の職員時代からアメリカ式捕鯨に係わる歴史に関心を寄せられ、当研究所図書室に足繁く通われ、この数年間は特に、カリブ海での原住民捕鯨について文化人類学的見地からの研究を続けておられた方です。昨年、カリブ海のベクウェイ島で5年振りにザトウクジラが捕獲されたことを最も早く知った日本人でもあります。

大隅理事長が本号で紹介している野島孝夫さんや、台蔵正一さん、そして浜口さんのように鯨や捕鯨に関し特別な関心をもって入れ込んでいる方は相当におられます。「日本のクジラ関連コレクター紹介」シリーズを企画して好評を博したこともあります。今後は当研究所職員による賛助会員への活動報告としての性格を優先しながらも、「賛助会員への通信」から「賛助会員との通信」にしていくために、研究所外部の方々のご登場にも力を入れていきたいと思っております。皆様のご協力を期待します。

(山村和夫)

(財)日本鯨類研究所役職員名簿及び記念写真(平成10年10月30日現在)

	役職名	氏名	写真No.
役員	理事長	大隅清治	1
	専務理事	守矢 哲	2
	理事(常勤)	猪瀬侃紀	3
	理事(常勤)	山村和夫	4
顧問	監事	村上泰三	
	顧問	長崎福三	
	顧問	田中昌一	5
総務部	顧問	島 一雄	6
	部長	池嶋 巧	7
	総務課長	本村秀昭	8
	職員	林 真人	9
	職員	横山嘉美(兼)	10
	臨時職員	吉田昭枝	11
	臨時職員	伊達清江	
	経理課長	武井裕子	12
	職員	横山嘉美	10
	副産物処理課長	池嶋 巧(兼)	7
職員	佐藤 宏		
情報・文化部	部長	猪瀬侃紀(兼)	3
	図書情報課長	猪瀬侃紀(兼)	3
	課長補佐	清家紀子	13
	臨時職員	三原佳子	
	広報課長	猪瀬侃紀(兼)	3
	職員	久場朋子	14
	(業務委託)	ダン・グットマン	
	(業務委託)	高木岑生	
	法学研究室長囑託	飯野清夫	15
	社会・経済研究室長	猪瀬侃紀(兼)	3
主任研究員	ガブリエル・ゴメス・ディアス	16	
研究員	大曲佳世	17	

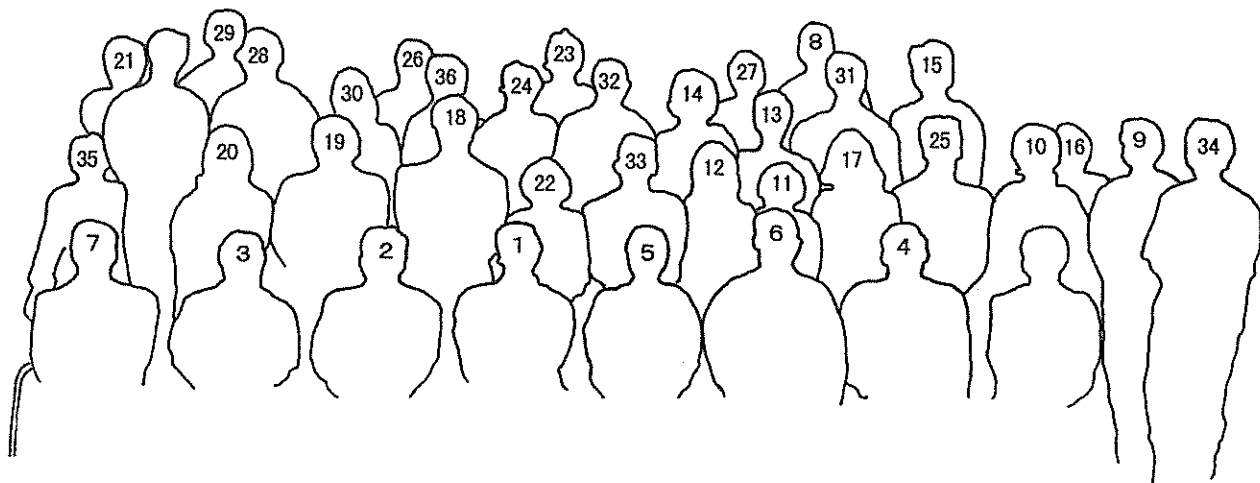
	役職名	氏名	写真No.
研究部	部長	藤瀬良弘	18
	部長代理	ルイス・バステネ	19
	部付職員	細根 弓	20
	資源数理研究室長	藤瀬良弘(兼)	18
	研究員	袴田高志	21
	鯨類生物研究室長	銭谷亮子	22
	研究員	坂東武治	23
	資源分類研究室長	後藤睦夫	24
	研究員	阿部秀明	
	生態系研究室長	藤瀬良弘(兼)	18
主任研究員 囑託	市橋秀樹		
研究員	田村力	25	
調査部	部長	山村和夫(兼)	4
	部長代理	西脇茂利	26
	調査企画室		
	採集調査室長	石川 創	27
	観測調査室長	西脇茂利(兼)	26
	研究員	松岡耕二	28
結核	研究員	村瀬弘人	
	臨時職員	村山美和	
	技術開発室		
川	付属実験場囑託	熱田安男	
	職員	及川宏之	
	臨時職員	安住佐樹子	

第12次南極海鯨類捕獲調査 調査員(臨時職員)

生物調査部主席調査員	油津 訓	29
生物調査部調査員	高月 恵	30
生物調査部調査員	筒井繁行	31
生物調査部調査員	大久保 淳	32
勇新丸調査員	渡辺政樹	33
第1京丸調査員	北嶋晃弘	34
第25利丸調査員	武田慎太郎	35
第2共新丸調査員	音瀬静恵	36



(平成10年10月30日 創立記念日)



ストランディングレコード (1998年9月~11月受付)

No.	種名	群数	雄	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-141	ミンクシラ	C	1		北海道	枝幸郡枝幸町間牧	950102	漂着	死亡		体長約5m。体表に傷有り。	大島陽		新聞情報(北海道950104)		翌頃発見。前日は時化。
0-574	種不明イカ	D	1		鳥取	百伯郡大山町平田海岸	960400	漂着	死亡			椋田崇生	鳥根大学大学院		頭骨(鳥根大学医学部)	5/8鳥根大学医学部で解剖。
0-577	オキノハシラ属	A	1		北海道	函館市古川町247海岸(津軽海峡)	970501	漂着	死亡		腐敗。体長約4m。	大島陽		新聞情報(北海道970502)		14:00頃発見。同日廃棄物最終処分場に埋却。
0-578	オキノハシラ属	A	1		北海道	苫前郡初山別村有明	970625	漂着	死亡		腐敗。体長約5m。	大島陽		新聞情報(北海道970701)		
0-579	ツチクシラ	C	1		北海道	久遠郡大成町富磯	971201	漂着	死亡		体長7-8m。腐敗。	大島陽		新聞情報(北海道971206)		種名は新聞記事による。16:30頃漂着。漂流後翌日富磯第二船揚場に再漂着。北部檜山衛生センターに埋却。
P-033	ゴマアザラシ	B	1	1	鳥取	鳥取市白兔海岸	980129	漂着	生存→飼育	0.975	体重17.2kg。生後10-11月。保護の後肺炎で死亡(新聞情報)。	椋田崇生	鳥根大学大学院		骨格(鳥取県博)	2/1鳥取県博に保護収容したが死亡。新聞記事(山陰中央新報980204)。
0-586	バンドウイルカ	B	1	1	石川	珠洲郡内浦町白丸	980426	漂着	死亡	2.7		山田格	国立科学博物館	坂井(1998)	骨格(のと海洋ふれあいセンター)	文献(226)。
P-034	ゴマアザラシ	B	1		北海道	広尾郡広尾町十勝港	980504	漂着	生存→飼育→放流		生後約3-4週間。衰弱。	山田格	国立科学博物館	新聞情報(十勝毎日980702)	DNA分析用血液。個体識別用写真(広尾海洋水族科学館)	広尾海洋水族科学館で保護。リリース後7/15放流。個体識別用に写真と血液DNAを採集しデータを登録。新聞記事(北海道980702, 北海タイムズ980715)。
P-035	ゴマアザラシ	B	1		北海道	中川郡登壇町大津漁港	980515	漂着	生存→飼育→放流		生後約3-4週間。衰弱。	山田格	国立科学博物館	新聞情報(十勝毎日980702)	DNA分析用血液。個体識別用写真(広尾海洋水族科学館)	広尾海洋水族科学館で保護。リリース後7/15放流。個体識別用に写真と血液DNAを採集しデータを登録。新聞記事(北海道980702, 北海タイムズ980715)。
0-580	カマイルカ	A	1		北海道	室蘭市地球岬沖約2km。	980701	漂流	生存		体長約1.7m。衰弱。	大島陽		新聞情報(北海道980703)	無し	水中写真家望月昭伸氏が発見撮影。
M-143	ミンクシラ	A	1		愛媛	東宇和郡明浜町狩浜久保瀬海岸	980722	漂着	生存→放流		体長約2m。外傷なし。生後間も無いと思われる。	西原博之	愛媛新聞社 東宇和支局		無し	11:00AM頃発見。明浜漁協、役場職員などが沖へ向けると遊泳。当初報道ではエナシクシラ。新聞記事(愛媛980724)。他報告者:山田格(国立科博)。
0-581	オカワコマッコウ	C	1		福岡	福岡市東区名島名島橋下(博多湾)	980806	河川迷入	生存			姪田密	海の中道海洋生態科学館		無し	9:00AM頃発見。干潮時は発見場所に留まっていたが15:00頃自力で沖に出た。新聞記事(朝日/西日本980807)。他報告者:山田格(国立科博)。

No.	種名	評	数	雄	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-137	ニククジラ	A	1	1		山口	豊浦郡豊北町角島 西側海岸	980820	漂着	死亡		頭部欠損、欠 損部除く体長 約6m。	戸島昭	山口県文書 館		肋骨、肩甲骨(報 告者)、脂皮(国 立科博、日鯨研、 神奈川大)	報告者の観察は9月6日。日鯨研のDNA 分析で種判定(後藤睦夫)。
0-575	スナメリ	B	1	1		三重	鳥羽市鳥羽3-3-6 地先(鳥羽水族館 裏)	980908	漂流	死亡	1.01	胃内に魚骨あ り。	古田正美	鳥羽水族館			鳥羽水族館が調査。
0-582	種不明イルカ	D	1			青森	上北郡野辺地町フ エー埠頭(津軽海 峡)(陸奥湾)	980908	港内迷入	生存			山田格	国立科学博 物館	新聞情報(東 奥日報98091 1)		9/10現在滞留中。新聞写真からマガイル かもしくはハンドウイルカの可能性有り。
0-583	ハナコントウ	A	1			秋田	秋田市飯島秋田マ リーナ	980909	港内迷入	生存		体長約3m、衰 弱。	柴田理	日本海セロ ン-研究グル ープ		無し	3隻の船でマリーナ沖へ誘導。9/12男鹿市 船越で同一と思われる個体を発見。発見 者がサーフボードで沖まで誘導。9/15再度マ リーナ沖で発見後不明。新聞記事(秋田魁 980913)。
M-138	種不明ヒゲクジラ	D	1		1	山口	豊浦郡豊北町角島 海士瀬戸(アマガセ ト)	980911	混獲(漁 船と衝突)	生存→ 死亡	11.03	詳細計測値有 り。	山田格/ 地曳会美 /藤岡茂 夫	国立科学博 物館/東京 大学/角島		骨格(角島・藤岡 氏)、脂皮(日鯨 研)、DNA-汚染 物質分析用組織 (国立科博)	7:10AM漁船と衝突し、角島元山港に曳 航された後肉は地元消費された。国立科 博らが9/14現地調査。日鯨研のDNA分析 でイワクジラもしくはニククジラと判定(後藤 睦夫)。他報告者:小林知吉(山口県外 海水産試験場、計測値も)、伊藤忠昭(下 関丸和鯨商会)。新聞記事(山口、毎日9 80912、山口980916)。9/14埋却。
M-139	サトクジラ	B	1		1	北海道	根室市春国岱	980911	混獲(定 置網)	死亡	6.45	詳細計測値有 り。	近藤憲久	根室市郷土 資料保存セ ンター		脂皮(日鯨研)	温根沼漁港に曳航。埋却。
0-576	スナメリ	B	1	1		三重	多気郡明和町八木 戸	980916	漂着	死亡		尾鰭欠損、吻 端-尾鰭基部1 52cm。	古田正美	鳥羽水族館			尾鰭は切断されていた。下顎から胸鰭基 部まで筋肉露出。鳥羽水族館が9/18調 査。
0-588	サラクイルカ	B	1		1	千葉	鴨川市東町1344東 条海岸	980919	漂着	生存→ 死亡	2.19	体重125kg。	鴨川シー ワールド海獣 展示課	鴨川シーワ ールド		骨格、内臓(シー ワールド)	12:00AM砂浜に漂着を発見。サーフーらが 沖合に戻そうとするが不可。保護のため 鴨川シーワールド搬送中に死亡。剖検後焼 却。
M-142	ミンクジラ	A	1		1	神奈川	横浜市本牧東南沖 8km(東京湾)。	980924	漂流	死亡		推定体長3.5- 3.8m。腐敗。 尾鰭欠損。	石川創	日本鯨類研 究所	第一報告者: 藤本朝海(江 ノ島水族館)	脂皮(日鯨研、国 立科博)	海上漂流個体を横浜海上保安部が本牧 埠頭に曳航。9/25日鯨研職員が調査。 日鯨研のDNA分析で種確認済(後藤睦 夫)。他報告者:山田格(国立科博)。新 聞記事(神奈川980925、朝日980929)。

No.	種名	評	数	雄	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-584	種不明イルカ	D	1			愛知	知多市新舞子字大瀬11-1(伊勢湾)	980926	漂着	死亡		腐敗顕著。	大池辰也/棚橋進	南知多ビーチランド	第一発見者: 水野慎也	無し	腐敗のため海洋投棄。種判定の材料なし。
0-588	ハナコントウ	A	1		1	新潟	岩船郡山北町脇川松陰一村上市瀬波三面川河口	980927	迷入→漂着→飼育	生存	2.62	体重168kg。10/14死亡。肺の出血性梗塞、敗血症。	加藤治彦/遊藤順治	マリンピア日本海		骨格、臓器(For./冷凍:マリンピア)、病理標本(鳥取大学)	9/27-10/2の間複数回元氣消失個体を発見。水族館職員らが保護を試みるが失敗。10/6漂着した所をマリンピア日本海に収容、集中治療を行うが981014死亡。0-583とは別個体と判断。他報告者:山田格(国立科博)。新聞記事(新潟日報981008)。
0-585	マッコウクジラ	A	1			山口	大津郡油谷町小田(油谷湾)	981001	湾内迷入	生存		体長約17m、成熟雄と思われる。	小林知吉	山口県外海水産試験場		無し	10/1午後には手長島付近から小田方面に遊泳している個体を発見。水深4-10m付近まで接近。漁船で沖まで誘導を試みたが失敗。10/2 8:00AM頃自力で湾外へ出た模様。他報告者:銭谷亮子(日鯨研)、田村一英。新聞記事(毎日981003、長門時事981009)。
0-587	スナメリ	B	1	1		愛知	知多郡南知多町大字大井字鷲ヶ崎海岸(三河湾)	981012	漂着	死亡	1.882	腐敗顕著。	大池辰也/近藤鉄也	南知多ビーチランド	第一発見者: 沢出美峰	頭骨(ビーチランド)、脂皮、筋、肝、腎(冷凍・愛媛大)、脂皮(三重大)。	埋却。
0-589	種不明イルカ	D	1			沖縄	中頭郡北谷町北谷白比川河口	981013	漂着	生存→放流		体長1.5-2m、左胸に傷有り。	松岡正道	出光興産	新聞情報(沖縄タイムズ981014)	無し	6:30AM頃産卵を発見。発見時は自力で動けず。発見者らが水をかけながら約2時間かけてイルカを深みに移動したところ9:20AM頃元気を回復し遊泳。他報告者:石川射(日鯨研)、山田格(国立科博)。新聞記事(琉球新報981013)。
0-594	ハナコントウ	B	1		1	静岡	沼津市原(駿河湾)	981019	漂着	死亡	2.8	体重248.6kg。鮮度良。	前嶋謙次/香山薫	伊豆三津シーパラダイス		頭骨(シーパラダイス)、脂皮、筋、歯、生殖腺(遠洋水研)、皮膚(日鯨研)	15:00発見。
0-590	オキゲハクジラ	B	1	1		山形	西田川郡瀬海町大字小岩川 岩石帯	981020	漂着	死亡	4.43	詳細計測値有り。歯萌出、闘争痕あり。	長澤一雄	山形県立博物館	第一発見者: 本間多三郎	骨格(山形県博)、臓器、脂皮、筋、胃内容(国立科博)、環境ホルモン分析用標本(環境庁)	14:00頃発見。山形県博、国立科博らが10/21剖検。胃内にイカ、ヒニールあり。左右肋骨各10本。腎臓内線虫寄生。新聞記事(朝日981023)。他報告者:山田格(国立科博)。

No.	種名	評	数	様	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-144	ミンククジラ	A	1	1		北海道	斜里郡斜里町英咲海岸	981023	漂着	死亡		体長約6m。腐敗顕著。	宇仁義和	斜里町立知床博物館	第一報告者：中川昭治(町自然保護監視員)	脂皮(日鯨研)	15:30頃発見。数日前からの時化で漂着。日鯨研のDNA分析で確識認済(後藤陸夫)。
0-591	スナメリ	B	1	1		山口	下関市細江新町細江埠頭(関門海峡)	981023	漂流	死亡	1.79	体重44.84kg。詳細計測値有り。	菊池拓二	下関市立下関水族館		全身冷凍(下関水族館)	
EXS045	ジュゴン	A	3			沖縄	名護市嘉陽沖1.5km	981023	目視情報	生存		親仔の可能性あり。	吉田基	三重大学生物資源学部	共同通信ニュース速報(981024)	無し	大型個体1小型個体2。3頭同時の撮影は初。他報告者：銭谷亮子、石川創(日鯨研)、山田格(国立科博)。新聞記事(琉球新報981024、沖縄タイムス/産経981025、東京981027)。
0-592	種不明イルカ	D	2			三重	多気郡明和町大滝漁港(伊勢湾)	981029	港内迷入	生存		背鰭有り。	古田正美	鳥羽水族館		無し	マイル科。翌日消息不明。前日の10/28、南隣の伊勢市有滝漁港に迷入後漁船について出たとの情報有り。新聞記事(朝日/読売981030)。
0-593	スナメリ	B	1			三重	鳥羽市安楽島町安久志地先(伊勢湾)	981029	漂流	死亡		体長約1.7m。表皮剥離。	古田正美	鳥羽水族館	第一発見者：山本清(鳥羽水族館)	無し	
0-595	スナメリ	B	1	1		愛知	知多郡美浜町小野浦(伊勢湾)	981106	漂着	死亡	1.614	初期腐敗。子宮内に白骨化胎仔あり。	大池巖也/駒場昌幸	南知多ビーチランド	第一発見者：國京和幸	頭骨、胃内容、胎仔(ビーチランド)、脂皮、筋、肝、腎(冷凍・愛媛大)、脂皮(三重大)、病理組織(鳥取大)。	口腔-食道にスズキ(36.8cm)が詰っていた。腹腔内にこぶし大の新生物3あり。埋却。
S-013	ジュゴン	A	1	1		沖縄	中頭郡与那城町(金武湾)	981113	混獲(刺し網)	死亡	1.1	体重31.7kg。網による?切傷多数。生後推定2ヶ月。	松岡正道	出光興産	新聞情報(沖縄タイムス981114)	国営沖縄記念公園水族館	国営沖縄記念公園水族館で生物調査。他報告者：吉岡基(三重大)、石川創(日鯨研)、山田格(国立科博)。新聞記事(共同通信ニュース速報/琉球新報981113)。
0-596	スナメリ	B	1			福岡	北九州市小倉北区藍島南西岸	981115	漂着	死亡		鮮度良。	岡崎英彦	北九州市立自然史博物館	第一発見者：黒河雅文(北九州自然史友の会)		10:15AM発見。

No.	種名	評	数	雄	雌	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-599	種不明イルカ	D	1		1	愛知	知多郡英浜町若松海岸(伊勢湾)	981115	漂着	死亡	1.67	詳細計測値有り。腐敗顕著。	駒場昌幸/ 棚橋進	商知多ビー チランド	第一発見者: 雪山正三	頭骨(ビ-チラ ト)、脂皮、筋、 肝、腎(冷凍・愛 媛大)、脂皮(日 鯨研)。	埋却。日鯨研でDNAによる種鑑定中。
0-597	オウキハシラ属	A	1		1	北海道	上磯郡上磯町三ツ石(津軽海峡)	981124	漂着	死亡	4.72	成熟。詳細計測値あり。	山田格	国立科学博 物館	第一報告者: 中村耕司(北 大北洋研)	骨格他(国立科 博)、病理組織 (鳥取大)、脂皮 (日鯨研)	11/28ストラディングコロデーネーター養成講座の一環として国立科博で病理解剖。他報告者:大島和浩(東京水産大)、佐々木徹也(札幌市保健所)。新聞記事(函館981125、北海道/東京中日スポーツ981127)。

*表中の「評」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日鯨研職員が調査や写真等によって鯨種を確認した場合、Bは他の研究者の方が鯨種の判定を行った場合、Cは鯨種の判定はされていても判定者が不明で判定に疑問がある場合や、判定が推定による所が多い場合を示しています。また「雄」「雌」各欄は、漂着総数のうち雌雄が判明した数のみを記入してあります。「体長」はmで記載してあります。記録番号の頭文字の“O”はハクジラを、“M”はヒゲクジラを示します。“EX”はストラディングの分類(鯨研通信387)にはあてはまらないものの、希少種の発見や珍しい事例について寄せられた情報を紹介しています。

* (財)日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、混獲した鯨類の情報(ストラディングレポート)の収集、記録を行っております。ストラディングを発見したり、新聞記事などの情報がございましたら、ぜひ日本鯨類研究所までご一報くださいますようお願いいたします。